

SEND プログラム 2015 年度派遣実施報告書

ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール
インドネシア大学スプリングスクール
チュラーロンコーン大学スプリングスクール

榎木 哲夫（国際交流センター センター長／教授）

河合 淳子（国際交流センター 教授）

稲垣 和也（アジア研究教育ユニット 特定助教）

目次

はじめに	iii
1 SEND プログラム	1
1.1 概要	1
1.2 SEND 準備	1
1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講	1
1.2.2 情報共有	3
2 実施状況	4
3 ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール	5
3.1 実施体制	5
3.2 募集要項とポスター	6
3.3 研修日程	9
3.4 参加学生一覧	10
3.5 ベトナム語会話教室	11
3.6 参加学生報告	13
4 インドネシア大学スプリングスクール	25
4.1 実施体制	25
4.2 募集要項とポスター	26
4.3 年度内実施を中止した経緯	29
5 チュラーロンコーン大学スプリングスクール	30
5.1 実施体制	30
5.2 募集要項とポスター	31
5.3 研修日程	34
5.4 参加学生一覧	35
5.5 タイ語会話教室	36
5.6 共同発表	38
5.7 担当教員所感	39
5.8 参加学生報告	41

はじめに

平成 24 年に開始し、25 年度から本格的に活動を始めた、世界展開力強化事業「『開かれた ASEAN+6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成」によるアセアン地域大学への学生派遣プログラムは、平成 26 年度には、サマープログラムとしてチュラーロンコーン大学、ハノイ国家大学（外国語大学、人文社会科学大学）、スプリングプログラムとしてインドネシア大学、シドニー大学への学生派遣にも拡大され、今年度はシドニー大学への派遣が見送られたものの、昨年度に引き続いて、ベトナム社会科学院、ハノイ国家大学外国語大学、ハノイ国家大学人文社会科学大学、チュラーロンコーン大学（およびインドネシア大学）に合計 17 名の派遣を行った。本事業を通じて、東南アジア諸国連合の国々における大学との交流事業として ASEAN 諸国との間の留学生交流が促進され、その流れは本学における「スーパーグローバル大学創成事業：京都大学ジャパングートウェイ」のプログラムにも繋がっている。



SEND プログラムとは、短期留学を契機とし、日本人学生がアジアを中心とした海外の派遣先大学で、その国の文化に触れ、人と出会い、新しい発見をすることによって、自分自身及び日本への再理解・再構築につないでいくための大学教育プログラムである。とくに本プログラムで育成を目指すグローバル人材には、主体的な思考力・行動力、高い語学力・コミュニケーション能力は勿論のこと、多様な民族、宗教、価値観、文化に対する理解や適応力といった能力に加え、日本人としてのアイデンティティをベースとしたグローバルな感覚・視点を涵養すること、が含まれていることが特徴である。派遣先の学生達との共学機会を通じて、「違いを見る」とともに「同じところを見る」という視点を併せ持つことの必要性を学生諸君に実感させることは、大きな意義があると考えられる。

あらゆる問題には答えが用意されていて、その答えが寸分違わず出せるものと思いついてきており、答えがないと困る受験勉強に従事してきた学生諸君にとって、このプログラムに参加することは、閉ざされた世界ではなく、開かれた世界を対象にしなければならないことを知り得る貴重な機会である。プログラム参加者は、知らない文化、初めての状況とのかかわりの中で、必要に応じて即興的に立ち現れる行為を実体験しなければならない機会に頻繁に遭遇することになったと思う。そして彼ら彼女らが、限られた期間内で効率的に修得する学びとは別に、学ぶ側の解釈の努力が引き出され、どう振る舞うかを考えさせられるもう一つの学びのあり方があることを気づいてくれたならば、本プログラムを実施する側として望外の喜びである。

このようなプログラムを企画・実施するには、それなりの経験と実績が必要である。国際交流センターには、学生派遣の実績がこれまでも多くあり、それが新しいプログラムを立ち上げる際に大いに役立ってきた。4 年度目を迎えた本 SEND プログラムでも、カリキュラムを練り上げる過程での先方の大学教員との連携がますます強固なものになってきた一方、め

まぐるしく移ろう ASEAN 諸国の地域特有の社会情勢の中で、予期せぬ事故や事件に対する危機管理についても更なる体制整備の徹底が望まれるところである。

末尾ながら、今年度の SEND 短期学生派遣に多大なご支援をいただいたアジア研究教育ユニット、学内各部局の先生方、事務関係者、さらに派遣先大学で学生が快適に修学できる環境を作ってくださった各大学の教職員の方々のご尽力に、厚く御礼申し上げる次第である。

2016（平成28）年3月

京都大学国際交流センター
センター長 榎木 哲夫

1 SEND プログラム

1.1 概要

SEND とは、*Student Exchange - Nippon Discovery* に対応する一種のバクロニム (backronym) である。これは、京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU) が提供するプログラムであり、日本を日本外からの観点に立って捉えなおし、アジア-日本間において共有される課題の発見・理解・解決を目指す、ということを目眼としている。

KUASU は、文部科学省による大学の世界展開力強化事業のプロジェクト (『開かれた ASEAN+6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成；平成 24 年度開始) の推進組織であり、その構成部局は、京都大学の文学、経済学、農学、教育学、アジア・アフリカ地域研究の各研究科と、国際交流センター、東南アジア研究所、人文科学研究所、経営管理大学院である。

本報告書は、国際交流センターを主体として実施された、平成 27 年度の SEND プログラム派遣事業について報告する。表 1 の上 2 件の短期派遣プログラムが実施された。下 2 件の派遣プログラムは、実施予定期間当時の情勢不安のため、年度内の実施を延期・中止せざるを得なかった。本報告書では、実施された上 2 件のプログラムの概要・教育的実践・課題を報告し、下 2 件のプログラムの延期・中止に至った経緯等について、その概要を述べる。

表 1 本報告書で扱う短期派遣プログラム一覧

形態	プログラム名称 (実施期間)	対象国
派遣	「ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール」 (平成 27 年 9 月 13 日 ~ 27 日)	ベトナム
派遣	「チュラーロンコーン大学スプリングスクール」 (平成 28 年 3 月 6 日 ~ 19 日)	タイ
(派遣)	「チュラーロンコーン大学サマースクール」 (延期：平成 27 年 8 月 30 日 ~ 9 月 12 日の予定だった)	タイ
(派遣)	「インドネシア大学スプリングスクール」 (中止：平成 28 年 2 月 21 日 ~ 3 月 6 日の予定だった)	インドネシア

1.2 SEND 準備

1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講

SEND プログラムに参加する京都大学学生には、日本語・日本文化についての紹介・説明の実践が課される。派遣プログラムでは、京都大学学生が主体となって派遣先大学にてその実践をおこない、受入プログラムでは、短期交流学生 (短期留学生) が主体となって京都大学にて実践をおこなう。ともに、日本人学生と外国人学生との共学を基盤とする。その準備の一助として、主に国際交流センターの教員がリレー式に担当する、「日本語・日本文化演習」(全学共通科目：拡大科目群/カルチャー一般科目) を平成 25 年度より開講している。その概要は、以下の表 2 にしめすシラバスの通りである。

表2 平成27年度「日本語・日本文化演習」シラバス

授業科目名、英訳	日本語・日本文化演習 Japanese Language & Culture		担当者所属 職名・氏名	国際交流推進機構 教授 河合 淳子 教授 パリハワダナ ルチラ 准教授 湯川 志貴子 准教授 阪上 優	
群	拡大科目群	系列	カルチャー一般科目	使用言語	日本語／英語
単位数	1単位	週コマ数	1コマ	授業形態	演習
開講年度 開講期	2015 前期／後期	配当学年	全回生	対象学生	全学向
曜日時限	月5／火2		教室	1共22／共北11	
授業の概要・目的					
日本人学生、特に海外大学に短期留学を計画している学生が、留学先大学において日本語を教え、日本文化を紹介するなどの経験とその準備を通して、日本文化を再発見し、その過程においてグローバルな視野に立った物の見方・考え方を養うことを目的とする。					
到達目標					
<ul style="list-style-type: none"> 日本語、日本文化を捉える多様な視点を理解すること。 本講義で学んだことを生かして、まずは授業内で、日本語や日本文化を実際に紹介する経験をする。 					
授業計画と内容					
多様な文化を有する人たちとの交流の中で、自国文化を多面的に理解し紹介できることが要請される場面は多い。日本人であっても日本語や日本文化について深い理解をもって解説するためには、言語・文化に意識的に向き合わなければならない。本授業は、日本語や日本文化を意識的に捉え、深い理解に立って外国人と見方や考え方を共有できるよう、講義・実習・討議を交えて進めていく。					
1回目 オリエンテーション <講義担当：河合、パリハワダナ、湯川、阪上>					
2～7回目<前期担当：パリハワダナ> <後期担当：河合>					
<ul style="list-style-type: none"> 非母語話者に対する日本語教授法解説 日本語教授法実習 講義内で随時発表の機会を設ける 多文化の中の日本文化 一何をどう伝えるかー (講義) 日本文化に関するプレゼンテーション準備及び討議 (実習) プレゼンテーション 					
8回目 日本文化とメンタルヘルス<講義担当：阪上>					
9～14回目<前期担当：湯川> <後期担当：パリハワダナ>					
<ul style="list-style-type: none"> 多文化の中の日本文化 一何をどう伝えるかー (講義) 日本文化に関するプレゼンテーション準備及び討議 (実習) プレゼンテーション 非母語話者に対する日本語教授法解説 日本語教授法実習 講義内で随時発表の機会を設ける 					
海外留学を考える学生を優先するが、これまでとは異なる新しい視点で日本語・日本文化を考えてみようとする学生や留学生の受講も歓迎する。なお、本授業は現在実施されている海外派遣推進プログラム (SEND: Student Exchange - Nippon Discovery) の推奨科目となっている。					
成績評価の方法・観点及び達成度					
積極的参加態度、課題提出、発表、プレゼンテーションを総合して評価する。 配点の割合は講義において示す。					
教科書／参考書等					
プリントを配布する／授業中に紹介する					
授業外学習 (予習・復習) 等					
実習、発表、プレゼンテーションの準備として、段階を追って随時課題が出される。各自、積極的に準備を行うことが求められる。					

1.2.2 情報共有

SEND プログラムを実施するため、以下の図 1 にしめすような情報共有体制を整備し、活用した。この情報共有体制は、プログラム実施期間中、期間後も活用した。矢印は、情報の行き来をあらわす。点線は、情報の行き来が部分的にすぎないことをあらわす。

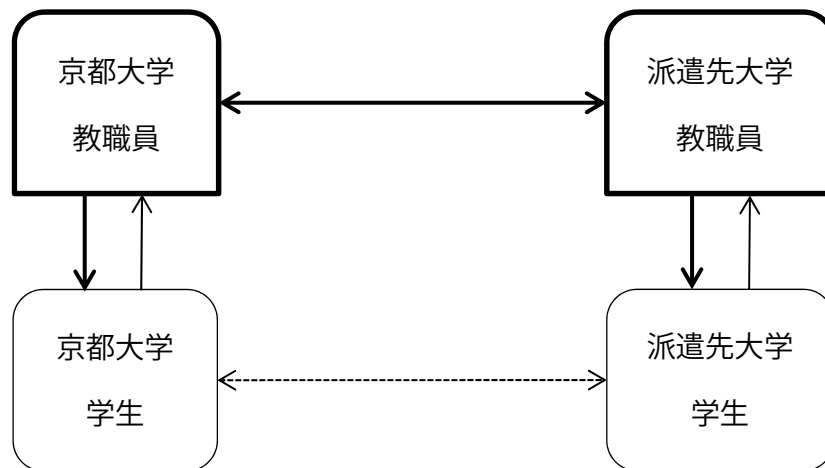


図 1 情報共有体制の概要

共有した情報の内容としては、以下のものがあげられる。

- 教職員－教職員間： プログラムの運営に関する教務・事務の背景情報
- 教職員－学生間： プログラム内容に関する教務・事務的情報
- 学生－学生間： 共同学習に関する情報

情報共有のためのツールとしては、以下のものがあげられる。

- 電話： おもに教職員－教職員間で使用
- Eメール： おもに教職員－教職員、教職員－学生間で使用
京都大学教職員は、教職員共用アドレスを活用
- Skype： おもに教員－教員間で使用
- クラウドストレージサービス： ファイル共有のために幅広く利用
- SNS： おもに学生－学生間で使用

また、緊急連絡網を作成し、とくに教職員間での危機管理体制の整備に努めた。

2 実施状況

本節では、本報告書で扱う2つの派遣プログラムへの学生参加状況および費用補助状況の概要について述べる。おもに費用の面から、短期派遣の京都大学学生の修学を支援する体制には、以下の二種類がある。

- ① 大学の世界展開力強化事業～ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援～
《「開かれた ASEAN+6」による日本再発見－SEND を核とした国際連携人材育成》
(文部科学省)
- ② JASSO 奨学金

以下の表3では、基本情報(実施期間・応募・参加学生数)、費目別の費用補助該当者数(学費・渡航費・宿泊費・チューター費)、奨学金受給者数(JASSO 奨学金)、各項目の合計人数を、上記①～②による費用負担の該当是非と合わせて示す。

表3 2015年度派遣プログラムの実施状況概要

	「ベトナム社会科学院・ ハノイ国家大学サマースクール」	「チューラーロンコーン大学 スプリングスクール」	計
実施期間	平成27年9月13～27日	平成28年3月6～19日	
応募学生数	10名	5名※	15名
参加学生数	10名	7名※	17名
学費補助	0名	① 7名	7名
渡航費補助	① 10名	① 7名	17名
宿泊費補助	① 10名	0名	10名
JASSO 奨学金	② 5名	② 6名	11名

※ 応募学生数5名のうち、1名は「チューラーロンコーン大学サマースクール」応募者である。また、参加学生数が応募学生数から2名増えているのは、「インドネシア大学スプリングスクール」応募者の2名が、同スプリングスクールの年度内実施の中止にともない、派遣先をインドネシア大学からチューラーロンコーン大学にシフトしたことによる。

3 ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール

3.1 実施体制

ベトナム社会科学院 (Vietnam Academy of Social Science [VASS])

実施責任者・担当教員

Dang Nguyen Anh

Director, Institute of Sociology

Nguyen Huu Minh

Director, Institute for Family and Gender Studies

ハノイ国家大学外国語大学

(University of Languages and International Studies
[ULIS], Vietnam National University, Hanoi [VNU])

実施責任者

Ngo Minh Thuy

東洋言語文化学部長

担当教員

Dao Thi Nga My

東洋言語文化学部・副学部長

Pham Thi Thu Ha

東洋言語文化学部日本語部門長

Nguyen Huyen Trang

東洋言語文化学部日本語部門・講師

ハノイ国家大学人文社会科学大学 (University of Social Science and Humanities [USSH], Vietnam National University, Hanoi [VNU])

実施責任者

Phan Hai Linh

東洋学部日本学科長

担当教員

Vo Minh Vu

東洋学部日本学科・専任講師

京都大学

実施責任者

杉万 俊夫

学生担当理事／副学長

森 純一

国際交流推進機構長・教授

榎木 哲夫

国際交流センター長・教授

伊藤 公雄

大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット長・教授

担当教職員

河合 淳子

国際交流センター・教授

佐々木 幸喜

アジア研究教育ユニット・特定助教

ドニークラーク 有美

研究国際部国際教育交流課交流支援掛・掛員

3.2 募集要項とポスター

SEND プログラム

2015 年ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクールプログラムのご案内

【日程】

- ・ 9月13日（日） ハノイ国家大学(ハノイ市)到着
- ・ 9月14日（月）～9月24日（木）
於 ハノイ国家大学（外国語大学、人文社会科学大学）、ベトナム社会科学院
オリエンテーション、ベトナム語・文化講座、学生交流、実地研修
- ・ 9月25日（金） 発表討論、修了式
- ・ 9月26日（土） 自由行動、出発
- ・ 9月27日（日） 帰国

【詳細】

- ・ 募集人数 : 10 名程度
- ・ 募集対象 : 京都大学に在籍する正規学部生・正規修士課程学生
(大学院生については、文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、
農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科に所属する者を優先する)
- ・ 募集条件 : 異文化体験・学習に高い意識を持つ者
- ・ 費用詳細 : 学費 未定[昨年度参考:約 20,000 円]
航空チケット代 95,000 円程度
諸費用(国内移動費・その他) 約 30,000~40,000 円
宿泊費 未定[昨年度参考: 約 49,500 円] ※近隣のホテル
海外旅行保険(全員必須) 約 11,870 円
※AIU 海外旅行保険「インフィニティ・プラン」加入
(治療・救援費用無制限に設定)
- ・ 補助金 : 以下のとおり各種支援を行います。
ただし、参加決定後の取消にはキャンセル料が発生します。
JASSO 奨学金(70,000 円) : 4 名 ※JASSO の支給要件を満たす者
費用補助(上限 124,800 円): 10 名

【申し込み】

- 申請手順: 1. オンライン申請を行う。(オンライン申請の手順については【別紙】参照)
2. 申請内容をプリントアウトしたものに自署し、以下の書類と共に所定の提出先に持参する。
- ①応募申請書(書式 1-1)
 - ②語学力証明書(書式 3、英語に関する記入のみで可)
 - ③志望動機
(A4 一枚程度、書式自由とするが、所属・回生・氏名を必ず記入すること)
 - ④成績証明書
 - ⑤海外留学誓約書
 - ⑥パスポートの顔写真ページ写し
(有効期限は入国時 6 ヶ月以上必要。
未取得者はその旨を申し出、早急に取得すること)

- ⑦収入に関する証明書（学部生：両親の世帯収入、大学院生：本人および配偶者の収入）
（JASSO 奨学金申請者のみ）
申請条件、提出書類については応募申請書「書式 1-1」3 頁を参照のこと

募集要項の確認及びオンライン申請は下記ホームページより行って下さい。

<国際交流センター> <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/>

<アジア研究教育ユニット (KUASU) > <http://www.kuasu.cpiet.kyoto-u.ac.jp/>

- ・申請書類提出先：教育推進・学生支援部 国際教育交流課 交流支援掛
（吉田南構内 吉田国際交流会館地下1階 国際企画連携部門 事務室）
- ・選考：書類審査および面接により行います。

【募集・選考スケジュール】

・申込締め切り：2015年6月26日（金）12:00(正午)

- ・面接：2015年6月30日（火）16:30～18:30
2015年7月1日（水）16:30～18:00
- ・最終結果通知：2015年7月2日（木）
- ・オリエンテーション：2015年7月3日（金）12:10～12:50（出席必須）
- ・海外渡航のためのヘルスケア・安全教育講義：
2015年7月予定（出席必須）

【備考】

- ・本プログラムは、同時期に実施される他プログラムとの併願を認めていません。
- ・本プログラムは、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「ベトナム研修」（前期集中）の単位に充当されることがあります。
- ・本プログラムは、国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（前期：月曜5限）を受講した上での参加を推奨しています。
- ・本プログラムには引率者が1名同行予定です（一部日程）。
- ・参加者全員に治療・救援費用無制限のAIU 海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づけます。
- ・本プログラムは、大学の世界展開力強化事業（ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援）「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SENDを核とした国際連携人材育成の一環として行われています。
- ・自然災害等その他事由により、プログラムが中止になることがあります。

2015年6月16日（火）に募集説明会を行います。

場所：本部構内 国際交流センター 多目的ホール 時間：12：10—12：50

～SENDプログラム～

ベトナム社会科学学院・ハノイ国家大学

Summer School

■2015年9月13日(日)～9月27日(日)■

【日程】

- ・ 9月13日(日) ハノイ市到着
- ・ 9月14日(月)～9月24日(木)
於 ハノイ国家大学(外国語大学、人文社会科学大学)、ベトナム社会科学学院
オリエンテーション、ベトナム語・文化講座、学生交流、実地研修
- ・ 9月25日(金) 発表討論、修了式
- ・ 9月26日(土) 自由行動、出発
- ・ 9月27日(日) 帰国

【詳細】

- ・ 募集人数 : 10名程度
- ・ 募集対象 : 京都大学に在籍する正規学部生・正規修士課程学生
(大学院生については、文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、
農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科に所属する者を優先する)
- ・ 募集条件 : 異文化体験・学習に高い意識を持つ者
- ・ 費用詳細 : 学費 調整中 [昨年度参考: 約20,000円]
航空チケット代 100,000円程度
諸費用(国内移動費・その他) 約30,000～40,000円
宿泊費※近隣のホテル(予定) 約55,000～60,000円(13泊)
海外旅行保険(全員必須) 11,870円
※AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」加入(治療・救援費用無制限に設定)
- ・ 補助金 : 以下のとおり各種支援を行います。(ただし、参加決定後の取消にはキャンセル料が発生します。)
費用補助(上限124,800円) : 10名
JASSO奨学金(70,000円) : 4名 ※JASSOの支給要件を満たす者

【申し込み】

下記HPより募集要項を確認し(備考も確認のこと)、オンライン申請後、必要書類をそろえ
南構内・吉田国際交流会館地下1階国際企画連携部門まで提出すること

担当: 国際教育交流課交流支援掛 075-753-5679

<国際交流センター> <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/>

<アジア研究教育ユニット(KUASU)> <http://www.kuasucpier.kyoto-u.ac.jp/>

- ・ 申込締切 : 2015年6月26日(金) 12:00(正午)
- ・ 面接 : 2015年6月30日(火) 16:30～18:30もしくは7月1日(水) 16:30～18:00
上記日程のうち1人10～15分程度
- ・ 最終結果通知 : 2015年7月2日(木)
- ・ オリエンテーション : 2015年7月3日(金) 12:10～12:50(出席必須)
- ・ 海外渡航のためのヘルスケア・安全教育講義 : 2015年7月17日(金) 12:10～12:50(出席必須)

本件照会先: 国際交流センター 河合 淳子/ 佐々木 幸喜

asean-send.6@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

(SENDプログラム代表アドレス)

募集説明会(申込不要)
2015年6月16日(火)
場所: 本部構内国際交流センター
国際交流多目的ホール
時間: 12:10～12:50



3.3 研修日程

2015 Vietnam In-Country Training
Period:13th September-27th September

As of 28th July

Date	Time	Category	Curriculum / Event	Lecturer / Staff	
Sun.,13th-Sep	10:30		出発 (VN331)		Kansai International Airport
	13:05		到着		Noi Bai International Airport
	Afterwards		ホテルチェックイン		ESALEN HOTEL
Mon.,14th-Sep	9:30		オリエンテーション		
	10:00 - 12:00	特別講義	Trade Relation between Vietnam Japan in the pre-modern time [教授言語:英語]	Assoc.Prof. Dr. Hoang Anh Tu	調整中
	Afterwards		キャンパス案内		
Tues.,15th-Sep	a.m.	USSH	授業参加 日本語文法IV [教授言語:日本語]	Dr. Nguyen Phuong Thuy	USSH・C402
	a.m. / p.m.		教室活動		
	p.m.		特別講義 ベトナム文化史 [教授言語:日本語]	Assoc. Dr.Phan Hai Linh	USSH・C504
Wed.,16th-Sep	a.m.	USSH	授業参加 日本の政治 [教授言語:日本語]	MA. Duong Thu Ha	USSH・C504
	p.m.		特別講義 ベトナムの文化遺産保存-Duong Lam村を事例に [教授言語:日本語]	Assoc. Dr.Phan Hai Linh	USSH・C504
Thurs.,17th-Sep	Whole Day	USSH	実地研修 Duong Lam Ancient Village		Duong Lam Ancient Village
Fri.,18th-Sep	a.m.	VASS	特別講義 調整中	Dr.Dang Nguyen Anh	調整中 (120分)
	a.m. / p.m.		特別講義 調整中	Dr.Vu Manh Loi	調整中 (120分)
Sat.,19th-Sep	Whole Day	USSH	国際シンポジウム 『第2次世界大戦期における日本・インドシナ・ベトナム関係一資料と認識』 [使用言語:日本語、英語、ベトナム語 (同時通訳付)]		
Sun.,20th-Sep	Whole Day				
Mon.,21st-Sep	8:30 - 9:30	ULIS	オリエンテーション	MA. Pham Thu Ha, MA. Nguyen Huyen Trang, 学生	A1棟 310号室
	9:30 - 11:30		特別講義 ベトナム語講座	MA. Nguyen Huyen Trang	A1棟 310号室
	13:50 - 15:40		授業参加 総合日本語 (1年次) [教授言語:日本語]	MA. Le Mai	C2棟 107号室
	16:00 - 17:30		授業参加 会話 (2年次) [教授言語:日本語]	MA. Dinh Huong Hai	C2棟 108号室
Tues.,22nd-Sep	a.m.	ULIS	特別講義 ベトナム語講座	MA. Nguyen Hai Ha	A1棟 509号室
	a.m. / p.m.		授業参加 異文化コミュニケーション (3年次) [教授言語:日本語]	MA. Hoang Thu Trang	B2棟 第2ホール
Wed.,23rd-Sep	Whole Day	ULIS	実地研修 Trang An		Trang An 7:30 ホテルのロビーで待ち合わせ
Thurs.,24th-Sep	7:50 - 9:30	ULIS	特別講義 ベトナム語講座	MA. Nguyen Hai Ha	A1棟 509号室
	9:30 - 11:30		授業参加 通訳 (3年次) [教授言語:日本語]	Dr. Dao Nga My	A2棟 610号室
	13:00 - 13:50		授業参加 会話3B (2年次) [教授言語:日本語]	MA. Kamiya (神谷先生)	C1棟 106号室
	13:50 - 15:40		授業参加 総合日本語 (2年次) [教授言語:日本語]	MA. Lai Thanh Hoa	C1棟 107号室
Fri.,25th-Sep	a.m.	ULIS	SEND 日越学生交流、発表討論	MA. Pham Thu Ha, MA. Nguyen Huyen Trang, 学生	A1棟 509号室
	a.m. / p.m.		SEND 日越学生交流、発表討論	MA. Pham Thu Ha, MA. Nguyen Huyen Trang, 学生	
	p.m.		SEND 発表討論、講評	MA. Pham Thu Ha, MA. Nguyen Huyen Trang, 学生	
Sat.,26th-Sep	a.m.		ホテルチェックアウト		ESALEN HOTEL
	Afterwards		自由行動		
Sun.,27th-Sep	0:05		出発 (VN330)		Noi Bai International Airport
	6:40		到着		Kansai International Airport

3.4 参加学生一覧

	氏名	Name	所属	学年
	斎藤 航	SAITO WATARU	総合人間学部	B3
	古市 秀和	FURUICHI HIDEKAZU	総合人間学部	B2
	石川 侑希	ISHIKAWA YUKI	文学部	B2
	南 保光	MINAMI YASUHIRO	法学部	B5
	今村 祥子	IMAMURA SACHIKO	法学部	B4
	東上 菜々子	TOJO NANAKO	法学部	B2
	住田 健輔	SUMIDA KENSUKE	経済学部	B4
	横田 光平	YOKOTA KOHEI	農学部	B3
	坂井 あんず	SAKAI ANZU	農学研究科	M2
	勝村 良裕	KATSUMURA YOSHIHIRO	経営管理教育部	M2

3.5 ベトナム語会話教室

Tutoring Vietnamese for SEND program's Japanese students (August 24th – 28th, 2015)

Trinh Ha Ngoc Bich

(D2, Graduate School of Environmental Studies)

24/08/2015

Objectives

- Introduction: 29 letters and 6 tone marks
- Guide for simple greeting and self-introduction
- Simple home assignment (Asking some students to think of vocabularies which they want to know at home, which will be taught at the next lesson)

Activities

- Practice Xin chào, tôi là...
- Pronounce and repeat; some explanation prints were delivered to students as references for pronunciation.
Tôi là sinh viên trường Đại Học Kyoto
Tôi đến từ Ehime, Nhật Bản
- Home work and explanations of next class.

Comments

- It is necessary to observe closely how each student “draw” and vocalize the alphabets in order to help them correct.
- It may be helpful to train 2 tough points:
(1) Groups of similar vowels such as: A, Ă, Â - O, Ô, Ơ and E, Ê - U, Ư.
(2) Groups of consonants which Japanese people commonly find hard to distinguish: (V,B) (S,X) (L,R)

25/08/2015

Objectives

- Revision
- The alphabet and tone marks
- Essential sentences, vocabularies
- N]umbers: Because we will need to speak the money, time, age, date...etc.

Activities

- Without looking at the texts, repeat the sentences together
- For the alphabets: speak, repeat, correct, combine them together
- Tạm biệt, Cám ơn rất nhiều, Hẹn gặp lại, Ngon Quá, Thích, Muốn, Ăn, Mua...
- Learn the basic numbers and practice to create other complex numbers.

Comments

- It is important to stimulate the brain of learners, force them to mobilize the sentences (not with seeing-hearing-repeating, but with experiencing).
- It is really challenging to make learners grasp the tone marks. There are various useful references which could be found from the Internet, including a figure that compared how “high” “low” “short” “long” the tones should sound.

26/08/2015

Objectives

- Revision
- Practice speaking TIME
- How to regard the second pronoun -“You” -in Vietnamese language?
- Vocabularies

Activities

- Play a game: Write down on the board many numbers, words, phrases and mix them together
> 2 teams divided, holding different color markers
> call out the random one written and they must fight to mark exactly that one quicker than the other team.
- Memorize the pronouns

Comments

- It is fun to do some fun. And games are to boost the learning will of all members, as well as to give them communication chances.
- The existence of many pronouns was thought to challenge learners, however, they could grasp and use them quite easily.

27/08/2015

Objectives

- Revision
- Essential phrases, starting with learning “the first person pronoun – I”
- Essential verbs , nouns, adjectives

Activities

- “Cho tôi cái này”, “ Cái này là cái gì”, “Cái này bao nhiêu tiền”, “ 1-2-3 Đô”, “Không, cảm ơn”...etc.
- Tiếng Việt, Tiếng Nhật, Bia, Nước, Com, Phở, Áo dài, Quà lưu niệm. Đi, Về, Học, Uống. Đau, Đói, No, Cay, Nóng, Lạnh, Vui, Đẹp, Dễ thương.

Comments

- At this point learners could make sentences by themselves, although the correction of pronouncing and phrasing is required. It will be the best when each student has their interested parts and memorize them on the spot.

28/08/2015

Objectives

- Consolidation and assessment test
- Advises before departure

Activities

- Dictation > cross checking
- Prepare dialogue in pairs with given topics > perform > cross evaluation
- Individual introduction speech > cross evaluation

Comments

- It was good that the final lesson was constructed to make everyone enjoy reviewing oneself and one another in an interactive and recreational style.
- Success of the class means each learner is satisfied with their experiences.

3.6 参加学生報告

ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール参加報告書

齋藤 航（総合人間学部3年）

今回のプログラムでは、ベトナムの言語や文化等を学び、また現地の日本語及び日本について学んでいる学生との交流を通じて、自国について再考する貴重な機会を得ることができました。

まず、第二次世界大戦期の日本とベトナムの関係をテーマとした国際シンポジウムへの参加や、ベトナムの文化等についての講義を通して、今まで知らなかったベトナムの新たな側面を学び、よりベトナムという国を身近に感じることができました。

そして、日本語や日本文化についての講義に参加させていただいたことも非常に有意義なものでした。このプログラムに参加する前に、日本語を学習する際にどのような点が難しいのかを知りたいと思っていましたため、この点について現地の学生に聞いてみると、漢字、文法、敬語が特に挙げられました。しかし、このような難しさがあるにも関わらず、積極的に日本語を使おうとしていた学生を見て、見習わなければならないと思いました。これまで日本語を「外国語」として特に意識したことがなかったため、新鮮な経験だったように思います。また、私のグループでは、このプログラムに参加した京大の学生 10 人とハノイ国家大学（外国語大学）の学生 17 人にお金と幸福をどのように見ているのかを調べるため、アンケートをとり発表したのですが、その結果も印象的でした。ベトナムの学生は、国が発展途上にあるためかお金の優先順位が高く、そして、日本人学生が友人との時間に幸せを感じるのに対し、ベトナムの学生は家族との生活に強く幸せを感じている人が多いという結果が出たのです。実際にアンケートをとることで両国の学生の金銭観や幸福感の違いが明らかとなり、大変興味深いものでした。そして、金銭観や幸福感は国の状態や文化によって大きな影響を受けるのだらうと改めて感じました。

二週間という短い期間でしたが、非常に中身の濃い経験をすることができました。現地の学生との交流は特に楽しく、私にとって大きな財産になりました。交流を通して、ベトナムの人々の生活を垣間見ることもでき、とても興味深かったと思います。

ただ一点反省点を挙げるとすれば、ベトナム語を使った交流があまりできませんでした。現地の言葉を使ってこそ経験できることもあると思うので、今後、ベトナム語を更に勉強し、再びベトナムを訪れたいと思います。

このプログラムを通して、更に多くの異文化に触れたいという気持ちが強くなると同時に、日本について学ぶ必要性を改めて感じました。このような貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール参加報告書

古市 秀和（総合人間学部2年）

今回のプログラムを通して、私の中で一番大きく変わったことは、他者とコミュニケーションをとることに対して多少なりとも積極的になれたことだと思います。現地の学生たちと交流するのは、最初はとても大変でした。はっきりと意味が聞き取れず、またうまく話題をふることもできず、曖昧な笑みを浮かべることしかできなかったのは、本当に情けなく、申し訳なかった。でも、一緒に行った先輩たちがどんどん現地の人たちと仲良くなっていくのを見て、とても羨ましく思い、思い切って話しかけると、だんだん現地の人々の興味を持つことなどが分かってきて、最終的には沢山の学生たちと友達になることができました。そういう意味では、現地の人だけでなく、一緒に行った日本の先輩たちにも強い刺激を受けたように思います。

それと、私は今回が初めての海外渡航だったのですが、異文化というものを、初めて実感をもって経験することができました。具体的に言うと、ブンチャ、フォーなどの食事やバイクの交通量、住居の様子などです。やはり見るのと聞くのでは大違いで、今までもっていた「日本と外国の文化は違う」という当たり前の知識が初めて自分の中で身を結んだように感じました。

そしてもう一つ、知識が実感に変わったことがあります。それは、自分は日本のことを全然知らないということです。逆に日本のことについて現地の人に教えてもらう始末で、すごく後悔しました。日本についてもっと知らなくてはという、焦燥にも近い感情を持てたことも、今回のプログラムの収穫だと思います。

さて、最後に今回のプログラムを終えて、これからの目標について考えてみました。このような異文化交流は、当たり前と思っていたことをそうではないと気付かせてくれ、自分の視野を広げる上でとても大切なものだと分かりました。このような異文化交流は、人生を通して続けていきたいと思っています。ただ、生来自分はあまりアクティブではありません。一年中外国を飛び回るようなことは無理だということも今回のことではっきりわかりました。ゆえに、このような国際理解への取り組みは、仕事というよりも趣味としてやるようになるかと思っています。

このように、進路については不透明なままですが、在学中に関して言えば、一つ目標ができました。それは、もう一度留学へ、できれば一ヶ月以上の期間で行くことです。欲を言えばヨーロッパに行きたいと考えています。今回のベトナムでも沢山の新しい発見がありましたが、やはりアジアは同じアジアでした。一方、肌の色から何からが違う文化圏に行くことは、自分にとってとても刺激になると期待しています。また、先進諸国が今の日本周辺についてどう思っているのかということにも興味があります。

自分は2回生で、大学院に行く予定もないので、もうあまり時間がありません。さしあたっては留学に関する情報を集めつつ、英語の力を蓄えようと思っています。

ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール参加報告書

石川 侑希（文学部2年）

今回このプログラムに参加したのは、今後の自分の進路について考えるきっかけを得るため、という大雑把な目的があった。入学前から「大学に入ったら留学したい」と思っていたが、学部で勉強したいこともまだあまり決まっておらず、今後の進路をどうするのか、そこに留学という選択肢はありうるのか、ということをはんやりと考えるだけになってしまっていた。そんな時にこのプログラムを見つけて、とりあえず海外でしばらく勉強する機会を作ってみようと思い、参加を決めた。

高校の世界史などでもベトナムの歴史には触れていたが、教科書で読むのと実際に行って学ぶのでは全く違うということを実感した。そもそもベトナムの歴史や文化・社会を詳しく学ぶ機会が日本ではあまりないが、実際に街や人々の様子を見て、それについて説明を受けたりすることで身をもって学ぶことができた。

またこのプログラム中、他の参加者からかなり刺激を受けた。私自身は海外に行くのが2回目と、参加者の中ではかなり少ない方だったが、他の方は皆海外経験が豊富で、留学の経験やこれまでに行った国の話などを聞くことができ、渡航前からかなり刺激を受けた。ベトナムに到着してからも英語の能力の高さに感嘆するばかりだった。現地の大学での授業や、学生と交流する際にも「その国について知りたい」という強い意欲が感じられた。

また、ベトナムの学生と交流していても発見することや学ぶことが多かった。日本語や日本文化を学んでいるという彼らは目を輝かせて「日本が大好き」「いつか日本に行きたい」と語っていた。なかなかベトナムの人々と交流する機会というのはないが、ベトナムから日本はどのように見えているのか知ることができた。数人の学生と仲良くなり、観光に連れて行ってもらったりもしたが、博物館などではベトナムの歴史を解説してくれた。もし逆の立場だったらあのように解説できるだろうか、と考えさせられた。

所属する文学部では将来西洋文学を専攻しようと思っている。今回このプログラムで得られた経験を活かして、研究対象とする地域にも実際に行ってみるなど、その場所を深く知る努力をしたいと思った。

今回失敗したと思ったのは、渡航前にあまりベトナムについて勉強していかなかったことである。高校の世界史で学んだわずかな知識もあまり覚えておらず、歴史博物館で解説をしてもらってやっと思い出す程度だった。写真で見た古い銅鼓などは「見たことがある！」と気付けたが、だからこそちゃんとベトナムの歴史を復習して臨めばもっと楽しめただろうと思った。

また、日本と違う環境（水や空気、食べ物、街の様子など）に戸惑い、うまくなじめないこともあった。海外に慣れている他の参加者はむしろそれを楽しんでいたようだったので、見習いたいと思った。

現地の大学ではベトナムの文化や歴史など、今まであまり知らなかったことを学ぶことができた。例えば 17 世紀のベトナムと日本の商業関係の授業では、ベトナムを中心に世界史を論じるという新鮮な体験をした。また、ベトナム語や日本語の授業でベトナム人学生たちと交流する機会が多くあった。現地の学生は日本語を学んでいるとはいえ、私たちの会話レベルとは程遠い。彼らに分かりやすい日本語で話したり、日本や京都について説明することで、自分は日本のことを本当にちゃんと理解できているのかと考え直すいい機会になった。また、「日本人の価値観」というテーマでプレゼンをすることになったが、日常あまり考えることのない事柄（美意識、恥文化など）について考え直すことができた。

他にも実地研修や自由時間に様々な場所を訪れたが、いずれもベトナムの学生やガイドの方に案内してもらえて、ただ観光に行くだけでは分からないようなことまで学ぶことができた。ドンラム村やチャンアンではベトナムの仏教文化に触れることができ、日本と似ている点も異なる点も発見することができた。伝統的な暮らしを守っているというドンラム村では、政府がツアーを奨励しているとあって土産物屋が並ぶなど観光地のような面もあり、伝統を守ることの難しさを知った。

SEND プログラムの基本的な趣旨は「海外の国と文化交流をし、互いの国に関する知識を深め、日本を再発見する」ということだったが。普段は当たり前すぎて考えることもないようなことを自分たちで調べたり、ベトナムの学生から教えられたりと、いい機会だった。

現地の学生と交流する中で、彼らは明確な夢や目標を持っていて、それに向かって一生懸命勉強しているという印象を受けた。「将来は何をしたいですか」と訊かれ、「まだ決まっていない」と答えるとよく分からない、という顔をされてしまったが、無理もないと思った。まずは自分の進路の上での目標を見つけたいと思う。

また、今回のプログラムで自分の海外経験の少なさを実感したので、これから様々な国に行ってみたいと思う。そこで出会う人々との交流のため、その国の言葉や歴史についての勉強もこれからはしっかりと行いたい。

ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール参加報告書

南 保光 (法学部5年)

私はこのプログラムで9月13日～27日の間ハノイに滞在し、現地の大学で講義を受け、現地の大学生との交流を行った。

報告については、まず、学習成果について述べたい。学習成果については大きく2点ある。一つはベトナムと日本の関係の歴史や、ベトナムの文化や社会などについて見識を深めることができたこと。一つはベトナムの人々から敬意を持たれている日本の一員としてより努力していこうと考えるようになったこと。前者について、私は特に印象に残っていることが二つある。一つ目は江戸時代にはすでに貿易を通して日本とベトナムの関係があったということだ。そして二つ目はベトナム人が独立のための戦争以降約30年もの間経験してきた戦争は今のベトナム社会に大きな影響を与えていることだ。後者については、日本のODAの協力をはじめ、日本のモノ作りや文化について敬意を持ってきている学生と多く接し、その学生たちの真摯な学習態度を見たことで、彼らにこれからも敬意を持ってもらえる日本という国を作っていきたいと感じた。そのために自分自身さらなる知識や見識を深める努力をしようとするようになった。

次に海外での経験について述べたい。海外での経験として私は二つ挙げたいと思う。一つは現地の学生との交流を通して得た気付き、一つは街中で気付いた発展途上国としてのベトナムの現状だ。前者については、現地の学生たちは自分たちの国がまだまだ発展の途上であるという意識を持って、より自分を高めようとして日本での勉学を希望していた。私は彼らとの交流を通して自身の生活や勉学の状況を振り返り、より努力を重ねていこうと考えるようになった。そして、後者について、特にインフラ整備の状況や衛生環境について日本と大きく異なっていたことに驚いた。私自身ひどい渋滞や腹痛を経験した。日本で当たり前になっていたインフラや衛生環境の大切さを実感し、発展途上国へのインフラ整備等の支援の重要性に気付いた。

そして、プログラムの内容について述べたい。今回のプログラムは主に4つの要素で構成されていたと思う。ベトナムに関する講義の受講、現地学生の授業への参加、現地研修やシンポジウムへの参加、そして現地学生との日越交流だ。これらについて良い点と悪い点について報告したい。良い点についてはそれぞれのプログラムでベトナムや日本についてそれらの関係やそれぞれの国の中身についての見方が変わったり、見識を深めることができたりと非常に有意義だった。特にベトナムという国が急速に経済的に発展している反面、日本と同様に少子高齢化、都市への人口や会社の集中といった問題に非常に速い速度で直面していることを知ることができたことは有意義だった。一方で悪い点については現地の大学との意思疎通が十分でなかったために、授業内容の変更や、事前の打ち合わせの必要性、教室変更などが学生に伝わらなかった。この点は次回に改善すべき点だと考える。

最後に、進路への影響について述べたい。私はすでに就職活動を終えたが、働くうえで東南アジアという国へより注目していきたいと考えるようになった。なぜなら、依然として発展する余地を残しており勢いのある国々だと考えられるからだ。また、学生との交流を通してより日本の発展に寄与したいとも考えるようになったので、そのために自分ができることを見定めていきたい。

ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール参加報告書

今村 祥子（法学部4年）

主な学習は基本的なベトナム語の習得と異文化交流でした。ベトナム語に関しては、飛躍的な成長があったとは言い難いものの、基本的な単語や日常会話のフレーズを言えるようになりました。短期間で効率良くベトナム語を学習できたことには2つ要因があったと思います。1つ目は、夏休みに1週間、事前研修としてベトナム人の先生がベトナム語教室を開いてくださったことです。ベトナム語の最難点ともいえる声調について事前に勉強をしたことは良かったと思います。2つ目は、講義以外の時間にも現地の学生と毎日食事や遊びにでかけたことで、ベトナム語を実践する機会や間違いを訂正してもらえる機会を多く持つことができたことです。今回の体験を通して、英語の重要性と現地の言語の重要性を実感し、帰国後の外国語の勉強に対するモチベーションがあがりました。

異文化交流に関しては、ベトナムに対する理解が深まったことはもちろん、日本に対しても考えさせられました。犬・猫の肉や虫のサナギ、羽化寸前の卵などを食べるベトナムの文化を肌で感じて、日本に住んでいるときに当たり前だと思っていたことが当たり前ではないことに気づかされました。どこでも道路が整備されていることや交通ルールが存在し守られていることは、日本にいる時は当たり前だと思っていましたが、ベトナムではそうでないことを目の当たりにしました。日本の技術や製品がベトナムにより適した形で伝われば、ベトナムの生活がより快適になるのではと感じることがありました。また、ベトナム人が毎日早朝から仕事や勉強に一生懸命とりくむ様子を見て、日本に帰国して毎日を最大限に活用したいという気持ちが強まりました。

海外の大学で学ぶ経験は、アメリカのワシントン大学に次ぎ2回目でしたが、今回のSEND プログラムの特徴は、現地の日本語専攻の学生との交流が多いことでした。そのため、観光地としてのベトナムだけではなく、ベトナムのローカル感をも実感することができました。また、交流した日本語専攻の学生たちは日本に対するの興味関心が大変強く、彼らからの日本に関する多種多様な質問を通じて、私自身が日本について考えさせられました。

2週間のベトナム滞在を通して、衛生面やカスタマーサービスの質などを比較して日本の良さを実感しました。さらには、ベトナム人に日本について褒めてもらう機会が多く、日本を誇りに思いました。

主な大学の講義は、ベトナムに関する歴史や社会の講義、ベトナム語講座、そして現地の学生の日本語授業への参加でした。それらに加えて、計2回の実地研修で世界遺産（ドンラム村・チャンアン）の見学がありました。

私は現在学部4年生で半期後に卒業を控えています。進路も決まっています、大学卒業直後の進路に大きく影響を与えることはないかもしれませんが、しかし、将来ビジネスを通して日本と海外の架け橋になりたいという思いは、より一層深まりました。このサマースクールに参加しようと思った理由は、現在進行形で急成長を遂げている東南アジアの国を現地に足を運んで見ておきたいと考えたからです。今回の経験は、ビジネスを通して世界で活躍するために、間違いなく将来に役に立つことと思います。

ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール参加報告書

東上 菜々子（法学部2年）

参加前から長期留学をしようかどうか考えていたが、今回の派遣で留学について具体的に考えることができるようになった。交流したベトナム人学生は日本にとっても興味があって、日本語を勉強しており、日本への留学を強く望んでいた。しかし、ベトナムでは留学は奨学金をもらって行くものだとの考えが普通であり、また、奨学金の獲得もとても難しそうだった。それと比べ、日本は様々な奨学金制度があり、私費留学という選択肢もあることから、留学を容易に考えられることのありがたさを感じ、機会があるのならと積極的な気持ちになった。また、メンバーの中には1年間の留学経験者が2人おり、留学先の授業や生活について具体的な話が聞けて、実感が湧いた。その2人の英語力や授業中の発言の積極性は他のメンバーよりも高く、留学の成果は大きいと思った。

ベトナムでは日本が非常に好意的に思われていることや、ベトナムがいかに発展しているかなど、現地へ来て初めて分かったことが多く、やはり、現地での国際交流の意義を実感した。特に、学生が一生懸命に日本語で交流しようとしてくれ、嬉しく思った。今後は交換留学や学生との交流を含むプログラムについて具体的に考えていこうと思う。

私にとって初めての東南アジア滞在であった今回は、驚きの連続だった。バイクの量や習慣の違い、気候の違いなどとても多くある。

出発前にベトナム語をみんなで少し勉強していったが、レストランやホテルでは英語でコミュニケーションをとることができ、大衆食堂に行ったのは現地学生と一緒にあったりと、ベトナム語を使う機会があまりなかった。実際に使ってみても発音が難しく、通じない場合も多々あった。途中からはベトナム語を話すことを少し諦めていた部分もあった。しかし、大学生が、日本語を熱心に勉強してうまく話す姿や、最後の交流会での日本語でのプレゼンテーションをしていた姿を見て、その気持ちを改めた。また、日本の大学生は第二外国語を疎かにしすぎていると思った。

また、日本に世界複合遺産は存在しないので、それに指定されているチャンアンへ行くことができ良かったと思う。

プログラムの大部分を占めているのは、日本語の授業への参加と特別講義である。日本語の授業に参加するというのは、自分のためにならないように思えるかもしれないが、日本語について日本では考えないようなことを質問されるのでそのようなことはない。また、自分が他の言語を学ぶ時と異なって、外国語の教授方法も観察することができ、面白かった。日本語を学ぶ学生との交流によって、ベトナム人の習慣や考え方などについて知ることができ、また、日本について伝えることもでき、有意義であった。特別講義は、ベトナムの家族と結婚、社会問題、文化史、言語についてであり、新しい発見が多くあった。

その他、ベトナム滞在中に現地研修でドンラム村とチャンアンへ行った。どちらの村にも特徴があり、非常に印象的であった。

私は将来の夢や就きたい職業がまだ決まっておらず、海外へ行く際や何かのイベントに参加する際にはいつも、将来やりたいことを決めるヒントを得ようと考えている。目標があれば自分のモチベーションがあがり、留学が役立つならばしたいからだ。ベトナム人学生に将来の夢を尋ねてみると、研究者や日系企業で働くなど既に明確な将来像を持っている学生が多くいた。彼らをうらやましく思うと同時に、自分も将来の目標を持ちたいと強く思った。特別講義でベトナムの現代社会を他の東南アジア諸国と比較する場面があったが、そこからさまざまな興味が沸いた。また、日本語教育や日本に関する教育が熱心に行われており、海外での教育に関わってみたいと思った。今回のSENDプログラムは、国際的な環境の中で働きたいと考えている私にとってとても収穫の多いものであった。

ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール参加報告書

住田 健輔（経済学部4年）

本留学を通じて日本にたいする海外からの視点を体感することができより日本のよさを海外に伝えたいと思うようになったとともに、海外からみえる日本の素晴らしい点を守っていきたいと思うようになった。海外から見える日本、今回はベトナムから見える日本は綺麗で、人は自立している印象が強いと聞いた。確かに実際日本は綺麗であるが、特別私が綺麗にしようと活動しているわけではない。そのような人や制度がしっかりしているからこそ海外からうらやましがられるような綺麗さは持続していると思う。そのような環境に感謝しなければならぬと感じた。また、自立しているというフレーズを良く耳にしたことも印象的であった。私が出会ったベトナム人の学生は積極的に日本語を学習し留学する意欲に溢れていた。私から見れば数段ベトナム人が自立しているように思えた。しかし彼らはそのように言ってくれることは素直に嬉しいことである。これからも「自立している」ことが日本人の印象として挙げられるように、私自身これから様々な面で胸をはって自立している人間にならなければいけないと感じた。

海外経験は2回目であり、1回目はイタリアであったため今回のベトナムは驚くことが多かった。ベトナムはインフラがまだまだ未発達である。例えば信号はあまりないがバイクに乗る人は多くいるため道路を横断するときは常に危ない。また建設途中の建物や道が多いため近くを通るときや中に入るときは非常に恐怖を感じる。しかし最初の1週間で慣れることができた。新しい環境で生活することは、怖く感じたり戸惑うことが多くあるが郷に入り郷に従えばそれなりに生活できる体験ができたことは良かったと思う。しかし慣れてしまえば無理をすることも増えてしまい、2日間熱で寝込んでしまったことは反省点である。やはり現地の人と日本人の体のつくりが異なる部分もあるので、日本人としての危機感を常に持つておくことについて学ぶ機会ともなった。

ベトナム人の学生と日本語の学習をともにした。普段文法意識しない日本語の添削や話し方の違和感を伝えるために、主語と述語を意識して日本語を話すようになった。改めて日本語の難しさを感じるとともに、表現の多様さを感じる学習であった。また逆にベトナム語を学ぶ機会もあった。ベトナム語は声調が6つもある。結局6つすべて発音しきれようにはならなかったが、少しでも音の高さが違うとベトナム人にとっては何を言っているのかわからないという体験は新鮮なものであった。

本プログラム参加前は海外で働くことは絶対に嫌だと感じていた。それはただ単に日本が好きだからである。しかし海外で働くことも面白いかもしれないと思うようになった。生活してすぐは不安なことだらけであるが、案外すぐに生活には慣れることができた。また2週間では現地の人とあまりコミュニケーションをとれるようにはならなかった。だからこそもっと長い間生活することで様々な人とコミュニケーションを取れるようになればもっと楽しい経験ができると思った。もし海外で仕事をするチャンスがあれば、積極的にチャレンジしていきたいと思う経験になった。

ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール参加報告書

横田 光平（農学部3年）

私は将来、海外で働きたいという夢があり、海外の人々との交流を学生のうちに経験しておきたかったのでこのプログラムに参加した。SEND プログラムのメンバーとしてベトナムで過ごした二週間はとても充実したもので、毎日が新しい発見と驚きの連続だった。ベトナムを訪れた初日に、路上で売られている生鮮食品の数々やあふれかえるほど大量のバイクによる交通渋滞を目にしたときは、ベトナムの空気に直に触れているのだということを実感し、ベトナムの文化学習への期待が高まったことを今でも覚えている。その後の二週間のプログラムはその期待以上のものとなった。

私は理系ということもあり文化や歴史には疎く、ベトナムに関する知識は乏しかったが、ハノイ国家大学やベトナム社会科学院での講義によってベトナムの歴史と文化のあらましを学ぶことができた。このような講義はただ単に私たちに知識を授けてくれるだけでなく、ベトナムの現状と発展の過程を把握しておくことで、その後の現地研修や学生交流においてより深い考察が可能となった。そういった点でも大学での特別講義は有意義だった。

二週間の研修で何よりも印象に残ったのはやはり現地学生との交流である。彼らは「日本が好きだから」「日系企業で働きたいから」「日本語講師になりたいから」など理由は様々だが、それぞれの夢のために真摯に日本語学習に取り組んでいた。朝早くから夜遅くまで勉学に励み、グローバルな将来展望を持つ彼らからは、日本人学生と同等かそれ以上の熱意が感じられた。将来、海外で働きたいと考えながら目標実現への努力を怠っている自分にとって、彼らとの交流は改めて自身のやる気を奮い立たせるよいきっかけとなった。また、学外においてもベトナムの学生と食事を共にしたり、ベトナムの名所を共に巡ったことで彼らとの親睦が深まった。彼らからよく耳にしたのが日本へのあこがれの気持ちだった。その思いを耳にするたびに嬉しさを感じるとともに、今後そのあこがれが失望へと変わることはないように、日本人として責任感のようなものも感じた。これからも日本とベトナムが互いに高めあえるような関係であるために貢献できる人材になりたい。

今回のプログラムを終えて、将来海外へ進出したいという私の思いはさらに強くなった。それは単に海外生活に楽しさを感じたからという理由だけによるものではない。このプログラムで現地の講師や学生と交流し、彼らの考えを耳にしたことで自身の視野が広がったように感じた。私はこれからも自身の視野を広げるために、様々な国を訪れ、交流の機会を増やしたい。そのためにもまだまだ未熟な自身の語学能力や専門知識を向上させていこうと思う。

ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール参加報告書

坂井 あんず（農学研究科 修士課程2年）

昨年春に行われたインドネシア大学 SEND プログラムに続いて、今回はベトナム社会科学院・ハノイ国家大学において2度目の SEND プログラムに参加させていただきました。本プログラムの内容としては、ハノイ国家大学の外国語大学・人文社会科学大学でそれぞれ1週間ずつ日本語学科の授業に参加させていただき、また週に1度社会科学院でベトナムの歴史などに関する特別講義を受講する、そして最終日に現地学生に向けて日本とベトナムの比較をテーマとしたプレゼンテーションを行う、といったものでした。

日本語学科の授業参加では、学年によって様々な内容がありました。例えば、現地学生の日本語の発音のチェックから、ベトナム語 ⇄ 日本語の通訳の練習、話し言葉から書き言葉への書き換え、日本人の感性についての紹介など、中には日本人の私たちにとっても難しいと感じてしまうような内容まで勉強されていました。授業の中では私たちが普段無意識的に使用している言葉や考えが多く取り上げられましたが、現地学生の「どうしてそう感じるの？ どうしてそう言うの？」といった質問に対してその理由を考え説明することで、私たちがこう思うのはこのような考えが根底にあるからなのだと改めて気付くことも多々ありました。日本や日本人が広く持つ感性についてさらに深く理解できたと感じますし、文化による考え方の違いを認識することもできました。

最終日のプレゼンテーションでは、私たちのグループは「日本の漫画文化」について紹介しました。その参考として、漫画についてどう思っているかという話を2週間現地学生の方々にたくさんお聞きしたのですが、ほとんどの方が日本の漫画を読んだことがある・とても好きだとおっしゃっていました。文庫本で読んだり、テレビアニメで見たり、インターネットで見たりすることは一般的になっているようです。日本で生まれたものが海外でこれほど楽しまれているということを知り、とても嬉しく感じました。「日本の漫画の歴史」と「日本とベトナムの漫画文化の現状の比較」を主な内容としましたが、歴史について初めて知ることや、日本の漫画文化について改めて気付いたことなども多々あり、準備をする中でも新しい発見がたくさんありました。

また、プレゼンテーションを作っていく中でとても難しいと感じた点があります。それは、表現の方法です。日本人同士だと、分かってくれるだろうと期待し言葉や説明を省略してしまうことも多くありますが、今回はこの表現で伝わるか、どのような構成だと分かりやすいか、興味をもってもらえるか、といったことを細かく考慮しました。これらはプレゼンテーションだけでなく、授業参加や普段の会話でも常に感じていたことなのですが、普段から意識しておきたいと思う点でした。

今回2度目の SEND プログラム参加でしたが、前回に引き続きたくさんの現地の方々と交流することができ、とても楽しくとても実りのある2週間となりました。来年度から就職する私にとって、学生最後の年に本プログラムへ参加できたことは大変貴重な経験です。

ベトナムは、今後さらに発展していくという力を非常に強く感じる国でした。私も大きな目標を持って勉強に励むベトナムの大学生に負けないよう、成長していきたいと思えます。

ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール参加報告書

勝村 良裕（経営管理教育部 修士課程2年）

今回の海外学習で改めて気づきを得られた点は、伝えること、発信することの大切さである。私は現在、社会人経験者として、大学院においてビジネスリーダーシップを学んでいるため、自身の経験を若い学生に伝え、発信していくことを、常に心がけている。この点、今回、現地学生との話の中で、学生から、年長者としての私のアドバイスを求められたケースもあった。このことは、日本と海外を線引きするのではなく、一人の人間として、どれだけのことを伝え、発信して、相手のことをサポートできるかという基本的な事柄を改めて認識させてくれた。

海外留学は、自分の感度のアンテナを広げた分だけ、学びの機会を広げることができる。今後も可能な限り、海外留学に参加していきたい。

海外の大学において短期間学習する経験は、今回が3回目である。

今回のプログラムの特徴は、2週間という短い期間であったが、その間、三つの大学（含む研究機関）で学ぶ機会があった点にある。通常、この期間であれば、一つの受け入れ先のみでの学習となることが多いが、今回、受け入れ先が多かったことは、その分、交流機会の拡大につながったといえる。

現地勤務、旅行および短期留学等、私は幾度かの海外経験を有している。今回、現地の学生と授業以外の時間も広く交流を行い、多くの場所に出向いたことで、現地の人の生活感覚を感じ取ることができ、またそれが他の国と比べて、どのような位置にあるかという点も認識することができた。

プログラムは、現地学生の日本語授業への参加、ベトナム語の学習およびベトナムの文化・歴史等の学習（世界遺産等の実地見学を含む）の三つに大別される。

これらのうち中心は、現地学生の日本語授業への参加であった。日本語授業も科目はいくつかに分かれ、日本語文法、作文および通訳等の授業に参加した。授業の内容は、日本の学生にとって参加的なスタイルとなるよう留意され、加えて現地学生との交流も幅広く組み込まれる等、日越双方の学生がメリットを得られるよう工夫されていた。ベトナム語学習の授業は計3回であったが、ベトナム語の初歩はカバーできた。また、ベトナム語の文化・歴史等の学習については、大学のみならず、国の研究機関である社会科学院での講義も受講でき、同国の問題意識（貧富の差、高齢化対応等）もうかがい知ることができ有意義であった。

プログラムにはこれら以外に、現地学生に対する発表および質疑応答の機会が設けられていた。発表に関する質疑応答では、日越両国の学生から積極的な質疑、意見交換が行われ実りある時間となった。

私自身、現時点で、卒業後の進路を明確に決定していない。ただ、自身でビジネスを起こすというイメージは抱いている。

現代はICT化の進展によって、ビジネス面でも国内・海外の垣根が一段と低くなってきている。とすれば、今回、海外マーケットの中でも発展の余地が大きいベトナムの事情を知ることができたことは、自身の将来にとって、価値のあることと評価している。

4 インドネシア大学スプリングスクール

4.1 実施体制

インドネシア大学 (University of Indonesia [UI])

実施責任者

Tantriana Widyaningsih Elfrida	Marketing Manager, LBI Faculty of Humanities
Dwi Puspitorini	Manager, BIPA Program
Leli Dwirika	Assistant Manager, BIPA Program
S. Prasnowo	Coordinator, Faculty of Humanities

担当教員

Himawan Pratama	Lecturer, Faculty of Humanities
-----------------	---------------------------------

京都大学

実施責任者

川添 信介	学生担当理事／副学長
森 純一	国際交流推進機構長・教授
榎木 哲夫	国際交流センター長・教授
伊藤 公雄	大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット長・教授

担当教職員

河合 淳子	国際交流センター・教授
稲垣 和也	アジア研究教育ユニット・特定助教
ドニークラーク 有美	研究国際部国際教育交流課交流支援掛・掛員

4.2 募集要項とポスター

SENDプログラム

2016年インドネシア大学スプリングスクールのご案内

Spring Intensive Course for Indonesian Language and Culture

申込締切：2015年12月10日(木)正午

【日程】

2016年2月21日(日) インドネシア・デポック市到着
2月22日(月)～3月4日(金)：講義および研修(於インドネシア大学)
3月5日(土) 自由行動
3月6日(日) 帰国

【プログラム概要】

本プログラムは、インドネシアで最も古くに設立された伝統ある高等教育機関のインドネシア大学において、インドネシア語学および文化についての講義、インドネシア文化体験、インドネシア語母語話者との日本語も交えた交流と発表討論、実地研修等の機会を提供する。インドネシアの言語、文化、社会、歴史等について知識を深めるとともに、高度な異文化理解・交流が得られる。

【募集詳細】

募集人数： 約10名
募集対象： 京都大学に在籍する正規の学部生および修士課程大学院生
(大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属の者を優先する)
応募条件： 異文化体験・異文化学習に高い意欲を持つ者

【費用詳細】

学費： 75,000～90,000円(参加人数により変動)
航空券： 76,000～86,000円(参加人数により変動)
海外旅行保険： 約12,000円
宿泊費： 20,000～35,000円(参加人数により変動、ゲストハウス2名1室が基本)
国内移動費： 約40,000円
※ 最終決定通知後に参加を取りやめる場合、キャンセル料が発生する

【補助・支援詳細】

費用補助： 10名程度(1名につき50,000～70,000円：参加人数により変動)
JASSO奨学金： 若干名(1名につき70,000円)
※ JASSO支給要件を満たす者、日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、かつ前年度成績評価係数が2.30以上の者に限る

【申込】

1. オンライン申請をおこなう(オンライン申請の手順については【別紙】参照)
2. 以下の書類(a-gは全員必須)をそろえ、下記の申請書類提出先に提出する
 - a. オンライン申請書を印刷し、自署したもの
 - b. 応募申請書(書式1-2)
 - c. 語学力証明書(書式3、英語に関する記入のみで可)
 - d. 成績証明書
 - e. 志望動機(書式自由、所属・学年・氏名を明記のこと、A4一枚程度)
 - f. 海外留学誓約書
 - g. パスポート(入国時に有効期限6ヶ月以上のもの)の顔写真ページのコピー(未取得者はその旨申し出、早急に取得)

- h. 収入に関する証明書（JASSO 申請者のみ。学部生は（両親の）世帯の収入、大学院生は、本人および配偶者の収入。申請条件、提出書類については応募申請書（書式 1-2 の 3 頁）を参照のこと）
- i. （任意）：語学試験（英語）のスコアのコピー

下記ホームページから、募集要項確認、オンライン申請、各種書類ダウンロードをおこなう。

<国際交流センター> <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/>

<アジア研究教育ユニット> <http://www.kuasucp.kyoto-u.ac.jp/>

申請書類提出先：吉田本部構内 旧石油化学教室本館 1 階 国際交流センター

国際教育交流課 交流支援掛 075-753-2205

選考：書類審査および面接によりおこなう。

【本件紹介先】 国際交流センター 河合 淳子 稲垣 和也 asean-send.6@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

【募集・選考スケジュール】

申込締切： 2015 年 12 月 10 日（木）12:00（正午）

面接： 2015 年 12 月 14 日（月）12:10-12:50、16:30-18:30

12 月 15 日（火）12:20-12:50、16:30-18:30

上記日程のうち、1 人 10~15 分程度

いずれも於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室 1

最終結果通知： 2015 年 12 月 17 日（木）

オリエンテーション： 2016 年 1 月 7 日（木）12:10-12:50

於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室 6（出席義務あり）

海外渡航のためのヘルスケア・安全教育に関する講義

2016 年 1 月予定（出席義務あり）

【備考】

- ・同時期に実施される他プログラムとの併願を認めない。
- ・国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（2015 年度後期：火曜 2 限）を受講した上での参加を推奨している。
- ・自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがある。
- ・参加者全員に、治療・救援費用無制限の AIU 海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づける。
- ・本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「インドネシア研修」（アジア研究）の単位に充当されることがある。
- ・本プログラムは、大学の世界展開力強化事業（ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援）「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成の一環としておこなわれている。

募集説明会

日時：2015 年 12 月 2 日（水）12:10-12:50

場所：吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室 6（I-S6）

SENDプログラム (2015年度)

インドネシア大学スプリングスクール

Spring Intensive Course for Indonesian Language and Culture

【補助金・奨学金付】

【日程】

出発日：2016年2月21日(日)

帰国日：2016年3月6日(日) (約2週間)

説明会：2015年12月2日(水) 12:10~12:50 @ 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室6



【プログラム概要】

インドネシアで最も古くに設立された伝統あるインドネシア大学において、インドネシア語学および文化についての講義、インドネシア文化体験、インドネシア語母語話者との日本語も交えた交流と発表討論、実地研修等の機会を提供します。インドネシアの言語、文化、社会、歴史等について知識を深めるとともに、高度な異文化理解・交流の場が得られます。

【詳細】

- ・ 募集人数： 約10名
- ・ 研修内容： インドネシア言語文化講義、学生交流、実地研修、発表討論
- ・ 募集対象： 京都大学に在籍する正規学部生・正規修士課程学生
(大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属する者を優先する)
- ・ 費用： 学費； 75,000~90,000円 (参加人数により変動)
航空券； 76,000~86,000円 (参加人数により変動)
海外旅行保険； 約12,000円 (AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」)
宿泊費； 20,000~35,000円 (参加人数により変動、学内ゲストハウス2名1室が基本)
国内移動費等； 約40,000円
※ 最終決定通知後に参加を取りやめる場合、キャンセル料が発生します。
- ・ 補助支援： 以下の通り各種支援をおこないます。
費用補助； 50,000~70,000円 (10名程度；参加人数により変動)
JASSO奨学金； 70,000円 若干名
※ JASSOの支給要件を満たす者、日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、かつ前年度成績評価係数が2.30以上の者に限ります。

【申込方法】

- ・ 申込み： 下記HPで募集要項を確認し、オンライン申請をおこない、必要書類をそろえて提出してください。<国際交流センター> <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/>
<アジア研究教育ユニット> <http://www.kuas.cpi.kyoto-u.ac.jp/>
- ・ 提出先： 吉田本部構内 旧石油化学教室本館1階 国際交流センター
国際教育交流課 交流支援掛 075-753-2205

【締切日】 2015年12月10日(木曜) 12時00分(正午)

【本件照会先】 国際交流センター 河合 淳子 稲垣 和也 asean-send.6@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

【備考】

- ・ 同時期に実施される他プログラムとの併願を認めません。
- ・ 国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」(2015年度後期：火曜2限)を受講した上での参加を推奨しています。
- ・ 自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・ 参加者全員に治療・救済費用無制限のAIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」加入を義務づけます。
- ・ 本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「インドネシア研修」(アジア研究)の単位に充当されることがあります。
- ・ 本プログラムは、大学の世界展開力強化事業(ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援)「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SENDを核とした国際連携人材育成の一環としておこなわれています。



4.3 年度内実施を中止した経緯

京都大学での学内募集をおこなう以前に、平成 27 年 11 月 17 日、京都大学国際交流センターの家本太郎准教授および京都大学アジア研究教育ユニットの稲垣和也特定助教は、インドネシア大学人文科学部の Himawan Pratama 講師および Leli Dwirika マネージャー (LBI) と、インドネシア大学人文科学部において、「インドネシア大学スプリングスクール」実施についての打ち合わせをおこなった。平成 27 年 11 月に本プログラムの学内募集を開始し、同 12 月に説明会と面接を実施したのち、平成 27 年 12 月 17 日に派遣学生 3 名が決定した。その後、追加募集をおこない、平成 28 年 1 月 22 日にオリエンテーションを予定していた。

平成 28 年 1 月 14 日、インドネシア、ジャカルタ中心部において爆発・銃撃事件が起こった。その後、本件について、在インドネシア日本国大使館、インドネシア大学における本プログラムの担当教員ヒマワン・プラタマ先生およびそのネットワーク、マスメディア等に依拠し、情報収集をおこなっていた。同 18 日、インドネシア国家警察長官が、訓練を受けた戦闘員がインドネシアに帰国して 14 日の事件よりも大規模な攻撃を実施する可能性があるとして発表した。また、チューラーロンコーン大学サマースクールの実施も、平成 27 年 8 月に起こった同様の事件のために中止され、半年後に延期となった前例があった。そのため、平成 28 年 1 月 22 日、オリエンテーションにて派遣予定学生の参加意思を確認したのち、国際交流センター教員、アジア研究教育ユニット運営協議会メンバーによる審議のうえで、平成 27 年度のインドネシア大学スプリングスクールの実施は見送ることに決定した。参加が決定していた学生のうち、2 名はチューラーロンコーン大学スプリングスクールに参加をシフトすることになった。

5 チュラーロンコーン大学スプリングスクール

5.1 実施体制

チュラーロンコーン大学 (Chulalongkorn University [CU])

実施責任者

Chomnard Setisarn	文学部東洋言語学科日本語講座・助教授
Namthip Methasate	文学部東洋言語学科日本語講座長・助教授

担当教職員

Yuphawan Sopitvutiwong	文学部東洋言語学科日本語講座・講師
Panlanan Thananchai	文学部東洋言語学科日本語講座・助手

京都大学

実施責任者

川添 信介	学生担当理事／副学長
森 純一	国際交流推進機構長・教授
榎木 哲夫	国際交流センター長・教授
伊藤 公雄	大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット長・教授

担当教職員

河合 淳子	国際交流センター・教授
佐々木 幸喜	アジア研究教育ユニット・特定助教（～2015年9月）
稲垣 和也	アジア研究教育ユニット・特定助教
ドニークラーク 有美	研究国際部国際教育交流課交流支援掛・掛員

5.2 募集要項とポスター

SENDプログラム
2016年タイ・チュラーロンコーン大学スプリングスクールのご案内
Spring Intensive Course for Thai Language and Culture

申込締切：2015年12月21日(月)正午

【日程】

2016年3月6日(日) タイ・バンコク都到着
3月7日(月)～3月18日(金)：講義および研修(於チュラーロンコーン大学)
3月19日(土) 帰国

【プログラム概要】

本プログラムは、タイ王国で最も古くに設立された、伝統あるチュラーロンコーン大学において、タイ語学習および文化についての講義、タイ文化体験、タイ語母語話者との日本語も交えた交流と発表討論、現地研修等の機会を提供する。タイの言語、文化、社会、歴史等について知識を深めるとともに、高度な異文化理解・交流が得られる。

【募集詳細】

募集人数： 5名程度
募集対象： 京都大学に在籍する正規の学部生および修士課程大学院生
(大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属の者を優先する)
応募条件： 異文化体験・異文化学習に意欲を持つ者

【費用詳細】

学費： 65,000～85,000円(参加人数により変動)
航空券： 80,000～90,000円(参加人数により変動)
海外旅行保険： 約12,000円(AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」)
宿泊費： 46,000～58,000円(参加人数により変動、2名1室利用が基本)
国内移動費： 約40,000円
※ 最終決定通知後に参加を取りやめる場合、キャンセル料が発生する

【補助・支援詳細】

費用補助： 5名程度(上限150,000円)
JASSO奨学金： 若干名(1名につき70,000円)
※ JASSO支給要件を満たす者、日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、かつ前年度成績評価係数が2.30以上の者に限る

【申込】

1. オンライン申請をおこなう(オンライン申請の手順については【別紙】参照)
2. 以下の書類(a-gは全員必須)をそろえ、下記の申請書類提出先に提出する
 - a. オンライン申請書を印刷し、自署したもの
 - b. 応募申請書(書式1-2)
 - c. 語学力証明書(書式3、英語に関する記入のみで可)
 - d. 成績証明書
 - e. 志望動機(書式自由、所属・学年・氏名を明記のこと、A4一枚程度)
 - f. 海外留学誓約書
 - g. パスポート(入国時に有効期限6ヶ月以上のもの)の顔写真ページのコピー(未取得者はその旨申し出、早急に取得)

- h. 収入に関する証明書（JASSO 申請者のみ。学部生は（両親の）世帯の収入、大学院生は、本人および配偶者の収入。申請条件、提出書類については応募申請書（書式 1-2 の 3 頁）を参照のこと）
- i. （任意）：語学試験（英語）のスコアのコピー

下記ホームページから、募集要項確認、オンライン申請、各種書類ダウンロードをおこなう。

<国際交流センター> <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/>
 <アジア研究教育ユニット> <http://www.kuasucpier.kyoto-u.ac.jp/>

申請書類提出先：吉田本部構内 旧石油化学教室本館 1 階 国際交流センター

国際教育交流課 交流支援掛 075-753-2205

選考：書類審査および面接によりおこなう。

【本件紹介先】 国際交流センター 河合 淳子 稲垣 和也 asean-send.6 * mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 （「*」を @ に変更）

【募集・選考スケジュール】

申込締切： 2015 年 12 月 21 日（月）12:00（正午）
 面接： 2015 年 12 月 25 日（金）12:20-12:40、18:10-19:00
 上記日程のうち、1 人 10～15 分程度
 於 吉田本部構内 旧石油化学教室本館 1 階 多目的ホール
 （面接予備日：12 月 28 日（月）12:10-12:50
 場所は異なる：於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室 4）
 最終結果通知： 2016 年 1 月 5 日（火）
 オリエンテーション： 2016 年 1 月 12 日（火）12:10-12:50
 於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室 6（出席義務あり）
 海外渡航のためのヘルスケア・安全教育に関する講義
 2016 年 1 月予定（出席義務あり）

【備考】

- ・同時期に実施される他プログラムとの併願を認めない。
- ・国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（2015 年度後期：火曜 2 限）を受講した上での参加を推奨している。
- ・自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがある。
- ・参加者全員に、治療・救援費用無制限の AIU 海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づける。
- ・本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「タイ研修」（アジア研究）の単位に充当されることがある。
- ・本プログラムは、大学の世界展開力強化事業（ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援）「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成の一環としておこなわれている。

募集説明会

日時：2015 年 12 月 10 日（木）12:10-12:50

場所：吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室 6（I-S6）

SEND プログラム (2015 年度)

タイ・チュラーロンコーン大学 スプリングスクール

Spring Intensive Course for Thai Language and Culture

プログラム日程：2016年3月6日（日）～3月19日（土）

説明会：2015年12月10日（木）12:10～12:50 @吉田南構内吉田国際交流会館講義室 6

【プログラム概要】

タイ王国で最も古くに設立された、伝統あるチュラーロンコーン大学において、タイ語学習および文化についての講義、タイ文化体験、タイ語母語話者との日本語も交えた交流と発表討論、実地研修等の機会を提供する。タイの言語、文化、社会、歴史等について知識を深めるとともに、高度な異文化理解・交流が得られる。

【詳細】

- ・募集人数： 5名程度
- ・研修内容： タイ言語文化講義、学生交流、実地研修、発表討論
- ・募集対象： 京都大学に在籍する正規の学部生および修士課程大学院生
(大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属する者を優先する)
- ・費用： 学費； 65,000～85,000円（参加人数により変動）
航空券； 80,000～90,000円（参加人数により変動）
海外旅行保険； 約12,000円（AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」）
宿泊費； 46,000～58,000円（参加人数により変動、2名1室が基本）
国内移動費等； 約40,000円
※ 最終決定通知後に参加を取りやめる場合、キャンセル料が発生します。
- ・補助支援： 以下のとおり各種支援を行います。
費用補助； 上限150,000円（5名程度）
JASSO奨学金； 70,000円（若干名）
※ JASSOの支給要件を満たす者、日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、かつ前年度成績評価係数が2.30以上の者に限ります。

【申込方法】

- ・申込み： 下記HPで募集要項を確認し、オンライン申請をおこない、必要書類をそろえて提出してください。<国際交流センター> <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/>
<アジア研究教育ユニット> <http://www.kuas.u.cpiet.kyoto-u.ac.jp/>
- ・提出先： 吉田本部構内 旧石油化学教室本館1階 国際交流センター
国際教育交流課 交流支援掛 075-753-2205

【締切日】 2015年12月21日（月）12時00分（正午）

【本件照会先】 国際交流センター 河合 淳子 稲垣 和也 asean-send.6*mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
(「*」を@に変更)

【備考】

- ・同時期に実施される他プログラムとの併願を認めません。
- ・国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」(2015年度後期：火曜2限)を受講した上での参加を推奨しています。
- ・自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・参加者全員に治療・救済費用無制限のAIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」加入を義務づけます。
- ・本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「タイ研修」(アジア研究)の単位に充当されることがあります。
- ・本プログラムは、大学の世界展開力強化事業(ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援)「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SENDを核とした国際連携人材育成の一環としておこなわれています。



5.3 研修日程

チュラーロンコーン大学スプリングスクール โครงการอบรมหลักสูตร Kyoto University Spring 2016			
月日 (曜)	時間	プログラム (場所/教室)	備考
วันที่ เดือน (วัน)	เวลา	กำหนดการ (สถานที่ ห้องเรียน)	หมายเหตุ
3月6日 (日)	15.45	เดินทางถึงประเทศไทย 到着 TG623 (スワンナプーム国際空港)	タイの学生3人出迎え (空港)、パンラナンさん出迎え (iHouse)
	18.00	宿泊料支払い・チェックイン (CU iHouse) ชำระเงินค่าที่พัก / เช็กรถ	
3月7日 (月)	09.00 - 12.00	チュラーロンコーン大学キャンパス案内 (401/2 MCS) แนะนำและนำชมมหาวิทยาลัย	パンラナンさんが8時頃出迎え (iHouse)
	12.00 - 13.00	昼食 รับประทานอาหารกลางวัน	チョムナード先生
	13.00 - 16.00	实地見学: ジム・トンプソンの家 พิพิธภัณฑ์บ้านจิม ทอมป์สัน	อาจารย์ชัชมนาด
3月8日 (火)	09.00 - 12.00	タイ国紹介・タイ文化入門 (601/9 MCS) ความรู้พื้นฐานเกี่ยวกับประเทศไทย	チョムナード先生 อาจารย์ชัชมนาด
	13.00 - 16.00	Thai Language and Culture (303 BRK, 授業参加、英語) ภาษาไทยกับวัฒนธรรม	シリポーン先生 อาจารย์ศิริพร
3月9日 (水)	09.00 - 12.00	タイ語講座 (601/19 MCS) เรียนภาษาไทย	サオワラック先生 อาจารย์เสาวลักษณ์
	13.00 - 16.00	タイ語講座 (601/19 MCS) เรียนภาษาไทย	カモンティップ先生 อาจารย์คมกฤต
3月10日 (木)	09.00 - 12.00	タイの歴史と文化講座 (401/14 MCS) สังคมและวัฒนธรรมไทย	チャーณวิวิท先生 อาจารย์ชานวิวิท
	13.00 - 16.00	タイ語講座 (401/14 MCS) เรียนภาษาไทย	ワンナシン先生 อาจารย์วรรณศิลป์
3月11日 (金)	09.30 - 12.30	タイ語講座 (601/19 MCS) เรียนภาษาไทย	カモンティップ先生
	13.00 - 16.00	タイ語講座 (601/19 MCS) เรียนภาษาไทย	サオワラック先生
3月12日 (土)	終日 ตลอดวัน	实地見学: 古都アユタヤ・伝統産業 ทัศนศึกษา อุทยานประวัติศาสตร์อยุธยา	前田先生 อาจารย์มาเอะตะ
3月13日 (日)	終日 ตลอดวัน	自由行動 พักผ่อนตามอัธยาศัย	
	09.30 - 12.30	タイ語講座 (601/11 MCS) เรียนภาษาไทย	サオワラック先生
3月14日 (月)	13.00 - 16.00	Japanese Reading for Business (404 BRK, 授業参加) การอ่านภาษาญี่ปุ่นเชิงธุรกิจ 課題: 「これが日本で話題 になっているもの」を簡単な日本語で各自紹介する。	ユッパワン先生 อาจารย์ยุพวรรณ
	09.00 - 12.00	タイ語講座 (601/9 MCS) เรียนภาษาไทย	ワンナシン先生
3月15日 (火)	13.00 - 16.00	实地見学: エメラルド寺院 ทัศนศึกษา วัดพระแก้ว	อาจารย์วรรณศิลป์
	09.30 - 12.30	タイ料理作り เรียนทำอาหารไทย (Floor 9 MCS)	ワンナシン先生
3月16日 (水)	13.00 - 16.00	自由行動 พักผ่อนตามอัธยาศัย	
	18.00 -	实地見学: アジアティーク ทัศนศึกษา เอเชียทีก	ボクシングショー ชมโชว์มวยไทย
3月17日 (木)	09.30 - 12.30	タイ語講座 (601/7 MCS) เรียนภาษาไทย	サオワラック先生
	12.30 -	自由行動 พักผ่อนตามอัธยาศัย	
3月18日 (金)	09.00 - 11.00	修了式 (815 MCS) พิธีรับมอบประกาศนียบัตร	
	13.00 - 16.00	Selective Topics about Japan 合同発表 (MCS501/13) รายงานกลุ่มร่วมกับนิสิตไทย 各班 15 分ずつ発表 (日本語) L47	増野先生
3月19日 (土)	10.40	เดินทางกลับ 帰国 TG672 (スワンナプーム国際空港)	

BRK อาคารบรมราชกุมารี: โบโรมาร์-ชัคมารี-บิล,

MCS อาคารมหาจักรีสิรินธร: มหา-ชัคกรี-สิรินธร-บิล

5.4 参加学生一覧

班 長	氏 名	Name	所 属	学年
	植島 慎介	UEJIMA Shinsuke	大学院工学研究科	M2
○	斉藤 侑奎	SAITO Yuki	法学部	B4
	仲井 侑馬	NAKAI Yuma	法学部	B4
◎	丹羽 功貴	NIWA Koki	文学部	B3
	押村 亜沙美	OSHMURA Asami	農学部	B2
	深谷 拓未	FUKAYA Takumi	総合人間学部	B2
	濱 希望	HAMA Nozomi	文学部	B2

5.5 タイ語会話教室

チューターとして思ったこと

Chonlada Charoenviriyakul

大学院薬学研究科 博士後期課程1年

(2015年8月24, 25, 26, 27, 28日担当)

私は、タイへ派遣する学生に向けたタイ語会話のチューターを担当しました。京大生がタイに派遣された時に生活できるように、最低限の日常会話を目標としてタイ語授業を行おうと思いましたが、残念ながら、2015年8月にバンコクで爆発事件があったため、タイへの派遣は中止されました。しかし、SENDプログラムへの参加を希望した学生たちはタイのことに興味を持ってくれると思い、かれらが将来タイに行く機会もあるかもしれないので、タイ語会話授業を続行しました。

授業で扱った事柄は、挨拶、自己紹介、道の尋ね方、料理の注文の仕方などでした。まずは、サワディークラブ/サワディーカ（こんにちは）、コップクンクラブ/コップクンカ（ありがとうございます）などの簡単な挨拶を教えました。次に、簡単な自己紹介も教えました。また、タイ文字も教えました。タイ語は、子音、母音、声調の組み合わせで単語を作るシステムを持っています。子音は44、母音は32、声調は5もありますので、タイ文字をマスターするには通常3か月ほどかかるようです。しかし、今回の授業は5時間しかなかったので、タイ文字の組み合わせまでは至らず、タイ文字の紹介しかできませんでした。また、自分の名前をタイ文字で書いてみました。日本人学生はタイ文字に興味を持っているようで、タイ文字の授業のあいだ、皆楽しく勉強していたようです。

タイに行く機会があるときに混乱しないように、言葉だけではなく、文化の違いや、タイではいけないことなどについても話しました。たとえば、トイレの使い方、電車の乗り方、タクシーの呼び方などです。タイでは、トイレを使ったときに便器のふたを閉めません。もし、ふたが閉まっていれば、それは便器が壊れているという意味です。

また、タイ料理を紹介しました。トムヤムクンやグリーンカレーは世界的に有名でみんな知っているはずなので、その以外のものを紹介しました。たとえば、地元の人が良く食べる、定番的な、カパオライス（タイ風豚肉とバジルのピリ辛炒め）とソムタム（ピリ辛パパイアサラダ）や日本人が好きになってくれそうなカオマンガイ（タイ風チキンライス）などです。タイ料理は辛いものが多いので、アウマイペッド（辛くしないでください）というタイ語も教えました。

タイ語授業を受けた学生の中で、タイ語を少し知っている人もいました。その学生にとっては比較的楽な授業でしたが、初めてタイ語を習った学生にとっては初めて見た言葉が覚えにくく、ちょっと厳しかったようです。それでも、頑張っって言葉を覚えてくれて、興味津々に勉強してくれたので、見ていてとても嬉しく思いました。

自分はタイ人なので当たり前ですが、普段はタイ語を無意識に使っています。しかし、授業中、タイ語やタイの習慣などについて聞かれて、この言葉はいつ、どの場面で使うか、初めて意識してタイ語について考えました。初めて気付いたこともたくさんありました。また、タイの習慣についても、「あ、これは日本と違うんだな」と初めて気付いたこともありました。自分にとってもタイ語やタイの習慣について理解が深まり、勉強になりました。

タイへ行けなくなっても、学生の皆さんはタイの色々なことについて興味を持っていてくれるようです。その様子は一人のタイ人としてとても嬉しく思いました。ありがとうございました。

รายงานผลการสอนวิชาภาษาไทย

สุทธิพงษ์ อ่างทอง

(Suttipong Anghong)

Research Student, Center for Southeast Asian Studies

วันที่ 9 มีนาคม 2016

เรื่อง การออกเสียงภาษาไทย

ในคาบนี้จะสอนนักเรียนถึงเรื่องวรรณยุกต์ และการออกเสียงในภาษาไทยว่ามีกี่แบบ ออกเสียงอย่างไรบ้าง

โดยผู้สอนจะดำเนินการออกเสียงให้นักเรียนฟังคำละ 1 ครั้งและให้นักเรียนออกเสียงตาม

หลังจากนั้นจะให้นักเรียนออกเสียงเองพร้อมกันหลายๆ ครั้ง

เพื่อให้นักเรียนสามารถแยกแยะระดับของเสียงวรรณยุกต์และสระในภาษาไทยให้ได้ถูกต้อง

วันที่ 10 กุมภาพันธ์ 2016

เรื่อง ตัวอักษรภาษาไทย

ผู้สอนจะดำเนินการสอนถึงวิธีการในการเขียนอักษรภาษาไทยโดยการเขียนให้นักเรียนดูหนึ่งครั้ง

หลังจากนั้นให้นักเรียนฝึกเขียนด้วยตัวเอง โดยใช้สมุดฝึกคัดภาษาไทย

หลังจากนั้นจะสอนถึงวิธีการออกเสียงภาษาไทยแต่ละตัว

รวมถึงข้ถึงตัวอักษรภาษาไทยบางตัวที่มีเสียงคล้ายกันแต่เขียนเหมือนกัน

วันที่ 16 กุมภาพันธ์ 2016

เรื่อง อาหารไทย ในบทนี้ผู้สอนจะแนะนำถึงประเภทของอาหารไทยชนิดต่างๆ

อาหารที่เป็นที่นิยมรับประทานของคนต่างชาติ

รวมถึงข้อควรระวังสำหรับอาหารบางประเภทที่อาจมีรสจัดเกินไปสำหรับคนญี่ปุ่น

ในบทนี้ผู้สอนจะนำรูปอาหารต่างๆ มานำเสนอให้นักเรียนได้ทราบ พร้อมทั้งบอกถึงส่วนผสมและวิธีการทำโดยย่อ

วันที่ 24 กุมภาพันธ์ 2016

เรื่อง การแนะนำตัว ข้อมูลทั่วไป และการเดินทางในประเทศไทย ในบทนี้นักเรียนจะได้ทราบถึงประโยคแนะนำตัวที่สำคัญ

ข้อควรรู้เกี่ยวกับประเทศไทย เช่น สภาพอากาศ เมืองสำคัญ ภูมิประเทศ รวมถึงจะแนะนำวิธีการเดินทางโดยวิธีต่างๆ

ในประเทศไทย เช่น การใช้รถไฟฟ้า และการใช้รถไฟใต้ดิน

วันที่ 25 กุมภาพันธ์ 2016

เรื่อง การพักในโรงแรม อาหารเช้า และร้านอาหาร

ในบทนี้นักเรียนจะได้เรียนคำศัพท์และประโยคสำคัญเพื่อใช้ในการสนทนากับพนักงานโรงแรมเรื่องการเข้าพัก

การสั่งอาหารเช้า รวมถึงการสั่งอาหารในร้านอาหาร ในบทนี้ผู้สอนจะสอนคำศัพท์และประโยคสำคัญๆ

หลังจากนั้นจะให้นักเรียนหัดแต่งประโยคด้วยตนเองและจัดกลุ่มสนทนาในชั้นเรียน

วันที่ 26 กุมภาพันธ์ 2016

เรื่อง การซื้อของ การเดินทางด้วยรถโดยสารประจำทาง และการเดินทางด้วยรถแท็กซี่

ในบทนี้จะสอนถึงประโยคสำคัญเพื่อใช้ในการซื้อสินค้าในประเทศไทย การใช้เงินของไทย

มารยาทและวิธีการต่อราคาสินค้า

รวมถึงยังให้สอนประโยคสำคัญสำหรับใช้ในการสื่อสารเมื่อนักเรียนต้องเดินทางด้วยรถโดยสารประจำทางและรถแท็กซี่

5.6 共同発表

日時： 2016年3月18日(金) 13:00~16:00
場所： チュラーロンコーン大学、マハーチャクリーシリントン・ビル 501/13 教室
担当教員： 増野 高司 (チュラーロンコーン大学文学部・講師)
稲垣 和也 (京都大学アジア研究教育ユニット・特定助教)

1. 「日本製品に対するタイ人の価値観」
齊藤 侑奎 京都大学法学部4年
Piraya Markpoon チュラーロンコーン大学文学部4年
Chutinant Dhimasombat チュラーロンコーン大学文学部4年
Jinjuta Benjaprompadung チュラーロンコーン大学文学部4年
Kornkanok Samachai チュラーロンコーン大学文学部4年
2. 「タイの広告における日本語の使用」
仲井 侑馬 京都大学法学部4年
Thanyalak Mongkhon チュラーロンコーン大学文学部4年
Kwanchewa Kamchareon チュラーロンコーン大学文学部4年
Punyanuch Khunleng チュラーロンコーン大学文学部3年
Nichapatara Tongvanichnobbakhun チュラーロンコーン大学文学部3年
3. 「タイ人の日本料理の食べ方」
植島 慎介 京都大学大学院工学研究科修士2年
Penpisut Kedgan チュラーロンコーン大学文学部3年
Ratikorn Srianutachai チュラーロンコーン大学文学部3年
Nattanit Buranaosot チュラーロンコーン大学文学部3年
4. 「日本人とタイ人のドラマの嗜好」
丹羽 功貴 京都大学文学部3年
Savinee Olansirisak チュラーロンコーン大学文学部4年
Tanatcha Saotayanant チュラーロンコーン大学文学部3年
Luksikarn Karnthanaluck チュラーロンコーン大学文学部3年
5. 「タイでの日本料理店の適応方略」
押村 亜沙美 京都大学農学部2年
Sittiwat Jaiwaree チュラーロンコーン大学文学部4年
Napaporn Deekhuntod チュラーロンコーン大学文学部4年
Chantra Wangcharoenwong チュラーロンコーン大学文学部3年
6. 「タイ文化に影響を与えた日本のファッション」
濱 希望 京都大学文学部2年
Satanee Rukpukdee チュラーロンコーン大学文学部4年
Chanya Luesakulkitpaisan チュラーロンコーン大学文学部4年
Mina Hirao チュラーロンコーン大学文学部4年
Chantra Wangcharoenwong チュラーロンコーン大学文学部3年
7. 「タイ人の日本観光ブームの背景」
深谷 拓未 京都大学総合人間学部2年
Patthadol Akkarasinyakon チュラーロンコーン大学文学部4年
Pitsinee Puernngooluerm チュラーロンコーン大学文学部4年
Thanchanok Navawong チュラーロンコーン大学文学部4年
Sirada Wittayaprechapol チュラーロンコーン大学文学部4年

5.7 担当教員所感

初の「スプリングスクール」をふり返って

チョムナード・シティサン

チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座・助教授

チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座と同学部アカデミックサービス・センターで共催する、本年度の京都大学のための短期学習プログラム「サマースクール」は事情により、実施時期を2015年9月から2016年3月に変更し、初の「スプリングスクール」として行われました。今回のプログラム内容もこれまでのものを踏襲し、タイ語やタイ文化の学習、授業参加、世界遺産に登録されている古都アユタヤやエメラルド寺院の現地見学、ムエタイショー観賞の他、初めての試みとしてタイ料理教室が開かれ、タイ風サラダとして親しまれている「ソムタム」作りに学生たちに挑戦してもらいました。そして最後は例年同様、チュラーロンコーン大学の日本語専攻の学生との共同研究の成果を報告してもらいました。



今回のスクールは、比較的涼しい9月ではなく、真夏に近い3月に行われたため、寒い日本からやってきた京都大学の学生の中には、タイの暑さにやや苦しめられた者もいました。特に初日の「ジム・トンプソンの家」の見学では、冷房のない学内バスで揺れられながらの移動のあと、緑の少ない都心の中、かなりの距離を歩くこととなったため、なおさら大変だったのではないかと思います。プログラム発案者としては大いに反省させられるところでしたが、次の日に全員が元気な姿を見せてしっかりと授業を受けに来たのを見ると、さすが忍耐と体力の日本の学生だと改めて感心しました。

残念ながら、都合により今回はプログラムを全日程でお世話することはできず、また最後に行われた合同発表も聞くことができませんでした。2月に京都で行われた短期交流プログラム「京都で学ぶアジアと日本」に参加したチュラーロンコーン大学の学生3名が志願してサポーターになってくれたことでより良いプログラム運営ができたのはとてもありがたいことです。SENDプログラムを通じてできた人的ネットワークが、このような循環的な交流に結実したことは大きな成果であると評価できると思います。それと同時に、このプログラムは日本または東南アジアのどちらかで開催するだけでは意味がなく、双方で開催して初めて真の対話が生まれるということが、今回の学生たちの交流を見て強く印象付けられました。チュラーロンコーン大学と京都大学の間で、このような相互の短期学生派遣が人的ネットワークをさらに拡大し、それを基にした真の対話が育み続けられることを願ってやみません。

มองย้อนหลังโปรแกรม “โรงเรียนฤดูใบไม้ผลิ” ครั้งแรก

ผู้ช่วยศาสตราจารย์ ดร.ชมนาด ศิริสาร
สาขาวิชาภาษาญี่ปุ่น ภาควิชาภาษาตะวันออก คณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย

โครงการการเรียนระยะสั้นสำหรับนักศึกษามหาวิทยาลัยเกียวโตหรือ “โรงเรียนฤดูร้อน” (Summer school) ซึ่งจัดโดยสาขาวิชาภาษาญี่ปุ่น ภาควิชาภาษาตะวันออก คณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัยร่วมกับศูนย์บริการวิชาการคณะอักษรศาสตร์ในปีนี้ได้เลื่อนจากกำหนดการเดิมคือเดือนกันยายน พ.ศ.2558 มาเป็นเดือนมีนาคม พ.ศ.2559 ทำให้กลายเป็นโครงการ “โรงเรียนฤดูใบไม้ผลิ” (Spring school) ครั้งแรก อย่างไรก็ตาม เนื้อหาส่วนใหญ่ของโครงการยังคงเป็นแบบเดิมคือประกอบด้วย การเรียนรู้ภาษาและวัฒนธรรมไทย เข้าร่วมเรียนรายวิชาต่าง ๆ ของคณะอักษรศาสตร์ เดินทางไปทัศนศึกษาที่จังหวัดพระนครศรีอยุธยาซึ่งได้รับการขึ้นทะเบียนเป็นมรดกโลกและวัดพระแก้ว ชมการแสดงมวยไทยโชว์ นอกจากนี้ยังมีโปรแกรมใหม่เพิ่มเติมขึ้นมา คือมีการสอนทำอาหารไทยอันได้แก่ “ส้มตำ” ซึ่งเป็นที่รู้จักกันดีในฐานะเป็นสลัดแบบไทย แน่แน่นอนว่า รายการปิดท้ายโครงการยังคงเหมือนเช่นทุกปีคือนักศึกษาต้องทำงานร่วมกับนิสิตที่เรียนภาษาญี่ปุ่นเป็นวิชาเอกเพื่อทำรายงานกลุ่มและนำเสนอร่วมกัน

ในครั้งนี้นอกจากได้เปลี่ยนช่วงเวลาจัดโครงการจากช่วงเดือนกันยายนที่ค่อนข้างอากาศเย็นสบาย มาเป็นช่วงเดือนมีนาคมซึ่งแทบจะเป็นเวลาที่อากาศร้อนจัดที่สุด ทำให้นักศึกษามหาวิทยาลัยเกียวโตบางคนที่มาจากประเทศญี่ปุ่นซึ่งยังหนาวเย็นเกิดอาการอ่อนเพลียขึ้นมาบ้างจากอากาศที่ร้อนจัด โดยเฉพาะในการไปทัศนศึกษาบ้านจิม ทอมป์สันในวันแรก ซึ่งต้องเดินทางด้วยรถโดยสารภายในมหาวิทยาลัยที่ไม่มีเครื่องปรับอากาศ ซ้ำยังต้องเดินเท้าเป็นระยะทางค่อนข้างไกลในบริเวณใจกลางเมืองที่มีต้นไม้ไม่มากนัก ในฐานะผู้คิดกำหนดการนี้ ข้าพเจ้ารู้สึกผิดมากที่ทำให้เด็ก ๆ ต้องเหนื่อย แต่วันรุ่งขึ้นพอเห็นพวกเขาทุกคนมาเรียนหนังสือกันอย่างสดใสสำเร็จ ก็รู้สึกประทับใจอีกครั้งกับความอดทนและพลังกำลังใจเหลือเฟือ สมกับที่เป็นนักศึกษาชาวญี่ปุ่น

น่าเสียดายว่า เนื่องจากติดธุระส่วนตัว ทำให้ในครั้งนี้อาจารย์ผู้จัดทำยังไม่สามารถดูแลโครงการได้อย่างเต็มที่ และไม่ได้เข้าร่วมฟังการนำเสนอการทำรายงานร่วมกันในวันสุดท้าย แต่ก็ได้นิสิตรุ่นพี่ ๆ ที่ได้เข้าร่วมโครงการการเรียนระยะสั้นชื่อ “เรียนรู้เอเชียและญี่ปุ่นที่เกียวโต” ซึ่งจัดขึ้นที่เมืองเกียวโตในเดือนกุมภาพันธ์อาสาช่วยเหลือดูแลโครงการในครั้งนี้ ทำให้ช่วยผ่อนแรงไปได้มาก ข้าพเจ้าคิดว่า การที่เครือข่ายความสัมพันธ์อันเกิดจากโครงการ SEND ได้กลายมาเป็นการแลกเปลี่ยนอย่างหมุนเวียนเช่นนี้นับเป็นผลงานชิ้นสำคัญอย่างหนึ่ง ขณะเดียวกัน เมื่อได้เห็นความสัมพันธ์อันดีระหว่างนิสิตกับนักศึกษาที่เข้าร่วมโครงการ ข้าพเจ้าก็รู้สึกอย่างแรงกล้าว่า โครงการนี้จะไม่มีวันมีความหมายหากจัดขึ้นที่ญี่ปุ่นหรือที่เอเชียตะวันออกเพียงฝ่ายเดียว แต่จะกลายเป็นการสื่อสารที่แท้จริงได้ก็ต่อเมื่อมีการจัดขึ้นทั้งสองฝ่ายเท่านั้น ข้าพเจ้าหวังเป็นอย่างยิ่งว่า การแลกเปลี่ยนระยะสั้นระหว่างจุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัยและมหาวิทยาลัยเกียวโตจะช่วยขยายเครือข่ายความสัมพันธ์ระหว่างบุคคล และเป็นรากฐานในการสร้างการสื่อสารอันแท้จริงเช่นนี้ต่อไป

5.8 参加学生報告

チュラーロンコーン大学スプリングスクール参加報告書

齊藤 侑奎（法学部4年）

今回のプログラムでは、主として ①タイ語の学習、②チュラーロンコーン大学生との共同発表、③課外活動を実施した。課外活動の中では、アユタヤ遺跡見学、アジアンティーク（タイボクシング）見学、寺巡りを行った。

このプログラム全体を通して、私に関心を持ったことが2点ある。

（1）日本人とタイ人の笑い方の類似点

1点目は、日本人もタイ人も、間違えた時にはにかんで笑うことがある点である。日本人は、質問で上手に答えられなかった時や発表などで言い間違えた時にはにかむように笑ってごまかすことがよくあるように思う。私は以前、弁論大会に出た際に、指導教官に「それは国によってはとても失礼な態度であるから、絶対にやめなさい」と注意されたことがあった。その為、海外の場では失敗した時に笑うことは極力避けるように心がけていた。しかし、チュラ大生も発表の際、小さな言い間違いをすると、はにかむように笑うことが何回かあった。その笑い方は、本当に日本人と同じようなはにかみ方で、私は驚いた。このような日本との類似点は、私にとって予想外のものであった。

（2）観光スポットのあり方

2点目は、観光スポットのあり方である。特に考えさせられたのは、バンコクで何百匹も並ぶパンダの模型である。広場一面に並ぶパンダの風景は「圧巻」の一言で、多くの人々が写真を撮りに来る、観光スポットとして成立している。実は、このイベントは期間限定で、国際会議に合わせて WWF という NPO の自然環境保護団体が、パンダの絶滅危機を訴えて行ったものである。今までに見たことのないような景色を見ることは、私自身楽しめた。しかし、「このたくさん集まっている人の内、いったい何人が団体の主義やイベントの目的を分かっているのだろうか」と疑問を覚えたのも事実である。観光スポットを訪れる際には、純粋に楽しむことに加え、その背景を知るのも重要ではないだろうか。観光スポットにおける、「集客を増やすこと」と「主催者のメッセージを伝えること」のバランスの難しさを感じた。

今回痛感したことは、自分には物事を判断する基準となる物差しがないことである。その為、はっきりと自分の意見を持ってない場面があった。まずは、自分の物差しとなるような得意分野をつくりたいと思う。私は4月から社会人になる。まずは自分の業界、自分の仕事に対する知識技能を身に付けて、それを自身のバックグラウンドにしていきたい。そして、自分の考えを持った上で、価値観の異なる人と交流し、さらに新たな知識や考えを吸収していこうと思う。

チュラーロンコーン大学スプリングスクール参加報告書

押村 亜沙美（農学部2年）

私はこのプログラムに参加して、主にタイ語、タイ文化の理解に力を入れた。平日はほぼ毎日、3時間以上のタイ語の授業を受け、その他にタイの社会的背景を習う、実地研修を行うなどのタイ文化に関する学習を行った。

タイ語を日本で少し学習していったものの、タイ語授業は難しく、毎日必死に学習する必要があった。しかし、その成果もあって、食事の注文や挨拶等ができるようになった。お店などで「タオライカ？（いくらですか?）」とタイ語を使うことができた時や、タイ語で値段を言われて理解できた時はとても嬉しく感じた。

実地研修ではアユタヤ、エメラルド寺院、ムエタイ観戦に行った。現地の先生方や学生さんの詳しい説明により、タイの歴史等の背景を理解することができた。また、現地の先生方や学生さんの配慮のおかげで、快適に過ごすことができたことに感謝したいと思う。

そして、タイに来て一番驚いたことは、若者の食習慣だ。タイの家庭では、あまり母親が料理をする傾向がないことにまず驚いた。しかし、スーパーで食材の値段を見ると割と高く、作る手間が省けるという点以外にも外食に頼る背景があることが分かった。また、ファーストフードの影響からか、若者の野菜離れが進んでいると感じた。学食でも現地学生が野菜の多いメニューを頼むことが少なく、料理に付いているキュウリなどの野菜を残すことも多い。タイの伝統料理を調べてみると野菜や果物をふんだんに使った料理が多く、タイ人の野菜嫌いは現代の問題だと分かった。

今回のプログラムでは多くのチュラーロンコーン大学の学生に助けてもらう事によって、円滑にかつ楽しく終えることができた。彼らはとても日本語が上手で、かつよく日本文化を理解していた。多くの人に日本への留学経験もあり、チュラーロンコーン大学の留学システムが十分に構築されており、かつ大学生も留学への関心が高いことが分かった。この留学への関心の高さは文学部に限られるものかもしれないが、京都大学の学生も見習うべきであると思った。

チュラーロンコーン大学には複数人の日本人大学生が長期留学しており、タイという異文化の中で学べるというのは羨ましいと感じた。私は専攻の関係上、チュラーロンコーン大学に留学する可能性は低いですが、将来タイなどの東南アジアで仕事ができたらいいと思った。

最後に、プログラムの企画をして下さった関係者の方々、並びに現地で私たちの世話をして下さいましたチュラーロンコーン大学の方々に感謝したいと思う。

チュラーロンコーン大学スプリングスクール参加報告書

濱 希望（文学部2年）

プログラム内容について、タイ語の授業は、テキストをかなり早足ですすめた印象でした。しかし、実際すぐに役立ちそうな会話表現ばかりで、その日授業で学んだ表現を昼休みに食堂で使ってみるなどしていました。学んだ内容をすぐ実践として試してみることができたのはよかった点の一つです。文化や歴史の面では、タイ周辺の国々の影響の強さについて、島国である日本との違いを感じました。アユタヤ遺跡を見学したときには街のなかに茶色いレンガの建物がところどころ現れてくる様子はわたしに異国を感じさせました。頭が無くなった仏像の列や崩れた建物、木の根に埋もれた仏頭には戦争の激しさや自然と人の世との時間の流れの違いを感じました。他にもムエタイ観戦、ワット・プラケーオ、タイ料理づくりなどがあり、どれもタイの歴史や文化を生で感じられるものでした。プログラムの最後、日本語学科のチュラ大生との合同発表には反省点はありますが、違う国の大学生と話し合い、一つのものを作り上げるといういい経験ができたと思います。

タイと日本の文化の違いはタイ人学生との会話や日常生活で感じるものが多々ありました。食の違いはもちろんですがわたしが驚いたのは、肩が凝ることや肩叩きの存在がなかったことです。何気なく話していて気づいたことですが本当に驚きました。季節の違いも日本とタイの文化の違いに大きく影響を与えていました。大学教育の違いも感じました。合同発表や実際の授業への参加によって気づいたことですが、日本では文献を読み解くことに比重を置いています。タイでは発表やプレゼンテーションに力を入れていました。合同発表の準備の際もタイ人学生は見やすいスライドを作ったりアンケートなどからデータを得たり発表に慣れている様子でした。またタイ人の英語力の高さに驚きました。

留学についてもともと興味はあったのですが、なかなか踏み込めずにいて今回のプログラムも思い切って参加したものでした。しかし、日本語学科の生徒の留学経験の多さや実際にチュラ大に留学している日本人を見て留学はそんなに珍しいことではないのだと思いました。京大の他の参加者にも大学のこのようなプログラムへ参加して様々な経験をした人が多くいます。今回のことから京都大学にはたくさんの海外研修プログラムや海外交流の機会が設けられていることに気づかされました。またそのようなプログラムがあれば是非参加したいと考えています。わたしたちの大学での生活をサポートしバンコクの街を案内してくれたチュラ大生たちのように、わたしも京都大学で外国からの留学生のお世話・交流をしてみたいと思います。

今回のプログラムでは多くの人に助けられました。チュラ大日本語学科の学生は毎日わたしたちを楽しませようとしてくれました。また私たちの生活のサポートをしてくださったチュラ大の先生方、準備から帰国後までお世話をしてくださる京大の先生方、本当にありがとうございました。

チューラーロンコーン大学スプリングスクール参加報告書

植島 慎介（工学研究科修士課程2年）

本プログラムの内容は以下の通りである。まず渡航前に京都大学国際交流センター主催のタイ語会話教室を受講した。そして、渡航後はタイの歴史や文化等の授業を座学形式で受講した。また、タイ語の講義を座学形式で受講した。この講義は合計8回で、1回の講義時間は3時間であった。加えて、日本で流行っている物や事柄について、日本語初級のタイ人学生の前でスピーチをした。講義以外では、アユタヤやワットプラケーオ等の世界遺産を訪れることで、タイの歴史や隣国との関係性について学んだ。また、タイの伝統料理（ソムタム）を実際に作ることで、料理や調理方法、食材等の知識を深めた。得られた知見等を踏まえて、現地の日本語専攻の学生と、日本とタイの価値観や作法、趣味嗜好の違いについて話し合い、最終的に発表した。

今回の渡航前にタイでの滞在経験は無く、その知識はほとんどなかった。また、語学に関しても、渡航前の事前語学研修を受講したのみであった。まず、今回の派遣に参加して、語学力が向上した。これは、1回3時間のタイ語講座を合計8回受講することによって、タイ語の発音や文法、単語等を理解することができたからである。タイ語講座に加えて、日本語専攻のタイの学生とタイ語を用いて積極的に話しかけたことも語学力向上につながったと考える。実際、日本でタイ語を学ぶより、タイで学ぶことで語学力は飛躍的に向上するようになったと感じた。なぜなら、疑問点をタイ人に聞くことで即座に解決することができることに加え、普段の生活でタイ語に触れる機会が日本と比較して圧倒的に多いからである。したがって、タイ語に限らず、語学の習得の際には、実際に現地に滞在することが効率的であると考えられる。これが難しい場合には、日常生活でその言語に触れる時間や機会を積極的に増やす必要があると言える。

次に、国際理解への意欲が渡航前と比較して、より高まったと考える。今回は2週間という短期の留学であったため、実際にタイの文化や歴史を十分あるいは詳細に学ぶことは出来なかった。そのため、タイの歴史や他国（主に日本）との関係等についての知識をより深めたいと感じている。さらには、タイだけでなく、諸外国の文化や歴史に関しても同様に理解を深めたいと感じている。また、このような学習意欲は、今回のプログラムに参加し、タイの文化に実際に触れた結果、生じたものである。したがって、今回のような国際交流に関するプログラムに学部時代から積極的に参加していれば、私の大学および大学院での学習態度や意欲は大いに違ったものであったと考える。

加えて、海外留学、特に長期の海外留学についてはより関心を抱くようになった。長期の海外留学についてより関心を抱くようになった。私は3月に大学院を卒業予定であり、4月から社会人として働くことが決まっており、当面、長期の海外留学に行くことはできない。しかし、学生生活が続く状況下に置かれていれば、長期の海外留学を視野に入れていただろう。なぜなら、短期の海外留学では得られない経験が長期留学では可能であり、異文化に触れる機会が短期留学よりも多くなるはずだからである。例えば、長期留学では、行動の範囲が広がる。留学先の大学付近のみならず、大学から離れた地域にも足を運ぶことができ、国内での文化の多様性等を学ぶことも可能だろう。さらには、その国の隣国等にも休暇等を用いて、容易に訪問することができ、貴重な経験をすることができるとも考える。したがって、私は長期の海外留学には非常に関心を抱いた。

本プログラムへの参加は今後のキャリアプランに大きく影響した。参加前から、海外で働くことに抵抗はなく、興味はあった。その興味はより一層増したと言える。これは、海外で働くことで、様々な価値観の異なる人たちと仕事をすることで、人間的に成長できると確信したからである。

最後に、今回のプログラムで渡航前から渡航後までお世話になった京都大学の関係者の皆様と滞在中に講義や日常生活でお世話になったチューラーロンコーン大学の関係者の皆様はこの場をお借りして御礼を申し上げる。

チューラーロンコーン大学スプリングスクール参加報告書

仲井 侑馬（法学部4年）

私は、いままで海外とは無縁の大学生活を送ってきました。このプログラムに参加したのは、海外に対して持っていた苦手意識を克服したいと思ったからです。今回のプログラムでは、チューラーロンコーン大学の学生との交流で日本語を使えたため、言語の壁に悩まされることはあまりなく、心置きなく異文化交流することができました。そのため、苦手意識は、少しは薄れたと思います。

今回のプログラムで、私は、以下の3点について力を入れました。

① タイ語、タイ文化の学習： 私は3時間×8コマあったタイ語学習に力を入れました。タイに来るまで、タイ語は全く習ったことがなく、文字さえも読めませんでした。そのため、当初どのように学習が進むのかとても心配しており、また授業についていけるか不安でした。しかし、授業が始まると、発音記号を使った学習だったこと、実際に使う場面の多い会話を中心だったことから、楽しくタイ語の基礎を習得できました。そして、タイ語講座で習った表現を街中で使うことができたとき、大きな達成感をえました。また、タイ文化の学習も興味深いものでした。特に、タイの基礎知識を学ぶ授業で、日本語学習者が全国に12万人もいるということを知り、とても驚きました。しかし、日本政府による日本語学習の支援などは、あまりないと聞きました。そのような部分で、親日国を増やすという意味でも、支援はしていかなければならないのではないかと思います。

② 共同発表： 私の班の発表内容は「タイの広告における日本語の役割」というものでした。実際、デパートの食品売り場や化粧品売り場に出かけてみると、商品名や表示に日本語があふれていました。日本製品であれば当然なのですが、タイ製品であっても日本語が使われているものが多くあります。私達はその原因に迫るべく、仮説を立て、アンケートを実施しました。その結果、日本製品に対する高品質感が消費者の関心を引いているという答えを導きました。私は法学部に所属していることから、ゼミで発表する際には、過去の判例を探したり、文献からの引用で資料を作ることができました。そのため、今回のように、実際に現地のデパートに行き、タイの商品／広告における日本語の使用について確かめ、さらにアンケートを実施した上での資料作りは新鮮でした。また、現地学生と共同作業ができたことは本当に良い経験になりました。

③ タイ学生との交流： 日中は、主にタイ語の勉強をしていましたが、授業後は、タイの学生にバンコクの観光地や、おいしいタイ料理屋に連れて行ってもらいました。観光地では、ガイドブックには載っていないようなことも教えてもらえたので、とても充実した時間を過ごすことができました。また、タイの諺や言い伝えなどの話も聞きました。日本のものと比べてみることで、文化の違いを感じ、それらは、社会の成り立ちの違いに、原因があるのではないかと、などと楽しみながら考えを巡らせることができました。

また、今回のプログラムは、私に大きな影響を与えました。今回の研修では、相手が日本語を話してくれた為、言語に不自由することなくプログラムを進めることができました。しかし、ときには伝えたいことが伝えられないこともありました。そのとき、どんなに立派なことを考えていようが、相手に伝わらなければ意味がないという、当たり前のことを再認識し、特に英語による意思伝達の重要性を痛感しました。

4月からは社会人になりますが、大学時代に英語の勉強を怠ったことを自虐的に話のネタにするのではなく、このプログラムを通して感じた英語ができないことへの焦燥感や敗北感をバネに、英語の勉強を再開しようと思いました。そして、可能であれば、海外の大学に留学することを望んでいます。私の目標は大使館勤務です。目標は高いのですが、達成できるように努力を続けるつもりです。最後になりましたが、このプログラムをつくりあげてくださった多くの方々に感謝を申し上げます。ありがとうございます。

チュラーロンコーン大学スプリングスクール参加報告書

深谷 拓未（総合人間学部2年）

「私の母は派手なものが好きなの。お洒落なの」ある現地の女子学生から聞かれた言葉である。

今回、世界遺産であるワット・ポー、ワット・プラケオはじめ、バンコク市内の多くの寺院を訪れた。その度ごとにそれらの色彩豊かな装飾に目を奪われた。一際目立つ暖色系や濃い緑色を多用するところは、タイの気候風土の影響であろうと確信してしまう。こうした建築物の装飾に実に象徴的なのだが、タイでは「派手なものは美しい」という感覚があり、冒頭紹介した発言は端的にそうした色彩感覚を表していると思われる。

プログラム前から料理は私の最大の関心であった。タイの料理は、辛いことで有名で現にその通りであるのだが、どの料理にも砂糖を使うことが特徴である。西洋の料理とは違って砂糖を多用するのは中華料理や日本料理と共通であって、同じアジア地域の料理の連続性を見た。さらに、タイの人たちは男女問わず、フルーツやジュースなどの甘いものを好み、よく口にしている。タイ人の先生に聞いたことだが、タイ料理の味つけは辛味、甘味、酸味の3要素で構成されているそうだ。辛い食事と甘味や酸味の効いた嗜好品という全体を見れば、その味覚の3要素がバランスよく構成されているのに気づかされる。

タイ人の人となりを観察すると、タイ人は対立を避ける傾向にあるということが見えてきた。例えば、語学初学者によく聞く「～は好きですか」という質問文は、タイ語の授業でも、親しい友人間の会話においても、あまり聞かれない。こうした yes/no の質問は個人尊重の意識がなければ仲間の輪を崩しかねないからであろうと思われる。逆に私が伝えた好き嫌いをタイ人が正確に覚えてくれたのは印象深い。

以上のように今回の派遣では現地の外から見える部分だけでなく、交流を通じた深い人間理解ができたのではないかと考えている。

タイは文化にせよ人々にせよ、日本との共通点が多く、比較的馴染みやすい国である。それゆえ大きなカルチャーショックもなく、円滑に生活が営めたという印象である。物価が安いいため、日本では頻繁にできない文化体験も気軽に参加できるという点は、タイの大きな利点である。また、海外で生活するといつも実感するのだが、だんだんと現地の生活に順応し、自分自身が変わっていくのが驚きである。そして回数を重ねればそれだけ変化のスピードも早くなるのである。そう言った意味で今回のプログラムは自身の順応性を高めた。

ほぼ毎日3時間以上のタイ語講座をはじめ、日本語によるタイ文化・歴史講座、料理教室、寺院見学会、現地学生との共同発表など、タイ文化を多面的に学習するだけでなく、主体的学習も行う。もちろん、タイ語講座が主な授業になるが、それ以外の授業・活動はどれも目新しく新鮮で、興味あるなしに関わらず意義深いものである。

日本語学科の学生らが、日本語を流暢に話し、多くの卒業生が日本をはじめとする外国企業に就職すると聞いて、感心した。中には日本に来て働く人もいるそうだ。グローバル化の中で、進路決定に当たって海外に積極的に挑戦していく姿勢は見習うべきである。私は人類学を専門としているが、異文化介入にはやはり言語力が必須であると再認識した。そういう意味で、今後専門とする人類学研究における現地言語習得の重要性を再認識し、自己の学習への大きな刺激となった。未だ進路は明確に決定していないものの、今回のプログラムは、異国の同世代の仲間たちの国境という枠を越えた進路選択を目の当たりにすることで、ますますグローバル化を意識し、既存の枠や国境を超越した広い視野を持って、慎重に自らの進路を選択しなければいけないという自覚を芽生えさせてくれた。

チュラーロンコーン大学スプリングスクール参加報告書

丹羽 功貴（文学部3年）

私はタイをはじめとする東南アジアにおける労働、人の移動などに強い関心があり、大学の研究ではこれらの分野を専門にしたいと考えていましたが、実際に現地でそのような分野に関するフィールドワークを行った経験や、実態を自分の目で見るような体験を今までにすることがなく、文献などによる知識しか持っていない状態でした。そのため、今回の研修は、実際に現地へ赴き自分の目で見たり、現地の大学生と意見交換したりすることでタイの社会や文化に関して広く知ることを目的として参加しました。結果として、実際にタイの様々な場所を訪れることができ、さらに多くの現地の学生と意見を交換することができ、極めて充実した研修となりました。

今回の研修では、日々のタイ語学習やフィールドトリップに加えて、タイと日本の文化交流の一環として、チュラーロンコーン大学の文学部日本語学科の学生とともに両国の文化に関する合同発表会を行うプロジェクトがありました。タイ人学生とグループになり、合同発表会の準備をする中で彼女たちと多くのディスカッションを実施することができました。我々は発表テーマを「タイ人と日本人のドラマにおける嗜好の違い」とし、それぞれの国のドラマの違いについて意見を交換する中で、タイ人学生からタイ社会の実態について聞くことができました。トピックとしては、タイ社会の賃金格差や所得格差の問題や、タイで生活する移民の問題など多岐に渡り、またそれらの問題に対するタイ人学生の意見や社会の反応についても伺うことができました。それらの中でも特に印象に残っているのは賃金、所得格差の問題についてでした。地域間の所得格差がタイにおける極めて大きな社会問題であることは以前から知っていましたが、タイ人学生から聞く田舎の地域の人々の生活の実態には文献を読むだけでは感じるこのできない生々しさがあり、問題の深刻さを実感することができました。また同じバンコクにおいても、コンビニエンスストアのアルバイトの賃金がおよそ時給30バーツ（日本円で約100円）であるのに対し、大学生の家庭教師の時給がその10倍近くもあることを聞いたときは、その圧倒的な賃金の差に愕然とすると同時に、学歴や専門技術を持っていない人々に対する社会からの極端すぎる評価の低さを知り、タイ社会について改めて強い問題意識を抱くことができました。

また、チュラーロンコーン大学の学生と共にプレゼンテーションを行うことができたことは非常に良い経験となりました。一般的な日本の学生とは異なり、チュラーロンコーン大学の学生は大学の課程で数多くのプレゼンテーションをこなしているため、効果的で魅力ある発表の技術を有しており、プレゼン力に非常に長けていました。彼女たちと発表準備を行うことで高度なプレゼンテーションの技術を学ぶことができました。ただ、学術的なディスカッションや準備の進め方に関して意見が合わないこともあり、やや戸惑うこともありました。しかし、苦悶しながらも彼女たちと話し合いを重ねることで一つの完成されたプレゼンテーションを作り上げることができ、大きな達成感を抱くと同時に、文化が異なる人たちとの共同作業を行う能力を向上させることができました。

2週間という短い期間のなかで、自身の学術的な知見や技術を向上させることができ、非常に充実した研修となりました。タイの社会を目の当たりにすることで、東南アジアに対する自身の問題意識をより強いものにすることができましたが、より確かな知見を得るためにもっと現地に赴く必要があること、もっと現地の人と関わりを持っていかなければならないことに気づくことができました。今後の学問活動では、今まで以上に具体的な問題に関心を絞り、文献調査やフィールドワークに対してより緻密な取り組みをしていきたいと思えます。

最後になりましたが、今回の研修につきまして、多方面で調整して下さった京都大学及びチュラーロンコーン大学の教職員のみならず、現地での生活やフィールドトリップなどでサポートして下さったチュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座の学生、合同発表会にて共に発表して下さったメンバーのみならずには、大変お世話になり、感謝しております。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

SEND プログラム 2015 年度派遣実施報告書

ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール
インドネシア大学スプリングスクール
チュラーロンコーン大学スプリングスクール

平成 28 (2016) 年 3 月発行

編集・発行 京都大学国際交流推進機構 国際交流センター／
京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
電話 (075) 753-5678

印刷・製本 株式会社 田中プリント
電話 (075) 343-0006